



2015 (平成27) 年12月15日 (火) 発行

〔発行所〕 応用生態工学会事務局 〒102-0083 東京都千代田区麹町4-7-5 麹町ロイヤルビル405号室

TEL:03-5216-8401 FAX:03-5216-8520 E-mail: eces-manager@ecesj.com HP: http://www.ecesj.com/

〔発行者〕 応用生態工学会 (編集責任者: 幹事長 藤田乾一, 事務局長 小川鶴蔵)

1	はじめに	1
2	第10期新会長挨拶	2
3	第19回郡山大会報告	3
3.1	第19回総会報告	3
3.2	第19回郡山大会報告	7
4	理事会・幹事会・委員会報告	15
5	第4次中期計画が策定されました	18
6	行事開催報告	23
6.1	第7回全国フィールドシンポジウム in 熊本	23
6.2	地域勉強会 in 福井	28
6.3	応用生態工学会長野現地見学会	30
7	2015年度行事経過と今後の予定	32
8	事務局より	34

1 はじめに

ニュースレターもこれが今年最後の号となります。今年は自然災害の発生が多い一年になりましたが、応用生態工学会においても、これに対応した新たな調査体制がスタートしました。

本年9月10日に発生した鬼怒川の決壊に鑑み、応用生態工学会では、会長の特命委員会「会長特命鬼怒川災害調査団」(団長: 北大中村太士先生、副団長: 九大島谷幸宏先生)を結成しました。研究者、技術者合計23名で構成される調査団を結成し、事前検討を行った上で、10月29日(木)に、ECO-DRRを検討するAチーム(チームリーダー: 北大山田浩之先生)、今後の災害復旧のインパクトの軽減手法を検討するBチーム(チームリーダー: 東邦大学西廣淳先生)に分かれ、現地調査を行いました。これらの調査結果は、今後、提言として取りまとめ、発信していく予定です。

さて、今回のニュースレターは、本年9月10日から12日にかけて開催した第19回郡山大会の報告を中心に、6月から11月にかけて開催した各地域でのワークショップなどの報告をお伝えいたします。

第19回総会では、大会期間中の最終日、9月12日に開催し、第10期役員を選出が行われ、新会長には辻本哲郎名古屋大学名誉教授が選出されました。新しい役員は、このニュースレターの郡山大会報告でも確認できます。

また、大会期間中に開催した第80回理事会では、来年の第20回大会(20周年記念大会)の開催日程と会場が決まりました。

開催日時は2016年(平成28年)9月2日(金)～4日(日)の日程で、東京大学(弥生講堂とその周辺施設)において開催することとし、大会実行委員長に虫明功臣東京大学名誉教授が決定しました。会員の皆様には日程の確保をお願いします。

2 第10期新会長挨拶 辻本哲郎名古屋大学名誉教授

さきほどの総会で応用生態工学会会長に推挙いただきました辻本でございます。

谷田前会長が立派に務めを果たされたあとを継ぐこととなり、これからの責任の重さをひしひしと感じております。

私はこの3月に名古屋大学を退職しました。大学という組織から離れて、肩の荷がおりた思いがしておりましたが、このたび応用生態工学会の会長という名誉と責任のある職を努めることとなり、抜けたはずの重みがまたひとつのしかかってきて、大変だなあと感じているところです。

思い起こせば97年にこの会が発足して以来、川那部先生、廣瀬さん、山岸先生、近藤さん、谷田さんたちが大変な努力をされ、それに導かれて非常に立派な会に育ってきたという気がします。

私は土木工学の出身ですが、この学会の活動を通じていろいろな違う分野の人たちと知り合う機会を得ました。それは生態学の人であったり、陸水学の人であったり、あるいは行政に携わっておられる人たち、必ずしも国土交通省だけではなく、環境省、農水省などのいろいろな方々であったりと多様で、そういうみなさんの多彩な見識や経験を直接うかがう機会を持つことができ、幸せでした。この学会が発足した当時はそういう交流の場はあまりなく、私たちの先輩が苦勞してそういう場を作ってください、それを通じて私たちが知り合い、夢を語り合い、それが成熟してきたわけです。

しかし私は、まだこの学会に少し欠けているところがあると思うのです。

それは、土木と生態学との間に新しい学問を作っていくところです。我々はやっとお互いをわかり合えて、双方の技術、知識を交換できるようになり、土木と生態学との間に新しい学問を作ろうとしていますが、それをどうやって体系化していくかについては、長い将来にわたってさらに努力して取り組んでいかなくてはなりません。

学会としては、我々の先輩が数次の中期計画の実施を重ねてきて立派な会に育ちつつあり、このたび第4次中期計画が発表されました。今や会長が一言言えば動くというのではなく、新しい役員の人たちやそれを支える会員の皆様と共に歩んでいくのだということは確信しておりますが、初心を忘れないということが大事だと思っております。

これからの次の時代を見据えて、みなさまと気持ちを合わせて、がんばっていくつもりでありますので、お導きいただきますようよろしくお願いいたします。



3 第19回郡山大会報告

3.1 第19回応用生態工学会総会報告

第19回応用生態工学会総会は、郡山大会の3日目、2015年9月12日(土) 10時30分～11時30分に日本大学工学部キャンパス70号館7014教室で開催されました。

総会は、事務局長から、学会規約第15条第4項による総会成立要件(正会員の5分の1以上の出席)を満たしていることが報告され、総会議長に弘前大学東信行准教授を選出して、総会が開始されました。以下に、概要を報告します。

総会は谷田会長のご挨拶があった後、議事に入りました。

まず、報告事項である「2014年度(平成26年度)事業報告」について藤田幹事長から報告があり、了承された後、以下の事項が審議されました。

1. 第1号議案 2014年度(平成26年度)決算・監査報告が審議され、以下の2014年度(平成26年度)決算報告、監査報告が承認されました。

- ・2014年度決算は、収支差額3,395,373円の黒字となった。
この黒字決算をもたらしたのは、収入総額が200,018円の減額、支出総額が3,595,391円の減額となり、支出が大きく減少したことによる。
- ・収入の増減要素では、主要財源である会費収入は101,634円の微減、事業収入は1,099,366円の減額となった。
事業収入の減額は、主に地域講座参加費が予算に対して減額となったことによる。
- ・支出の増減要素では、管理費はほぼ予算内に収まった。
支出の大幅減額の要因は事業費の減額3,627,357円が主なもので、その内訳では会誌編集費の減973,990円が大きく、会誌の印刷費用が減額となったことによる。このほか、会議費は節減等により427,641円の減額、委員会活動費は1,229,653円の減額となった。委員会活動費の減額は、テキスト刊行費800,000円について、出版社との出版契約が整い、経費の支出が不要となったことなどによる。
また、80万円の支出超過を見込んでいた大会費は、支出が990,071円の減額となり、大会費の収支はほぼ均衡となった。
- ・以上の状況を概括すると、3,395,373円の黒字は、会誌論文掲載数の減少、会議費や委員会活動費の節減等によるところが大きく、今後、学会活動の一層の活発化によって、予算の均衡は大きく変化する状況を含んで推移している。

なお、参考事項として「2015年度事業実施状況・収支見込み」が説明され、了承されました。

2. 第2号議案 2016年度(平成28年度)事業計画案、第3号議案 2016年度(平成28年度)予算案が以下の内容で審議され、承認されました。

- ・2016年度の予算作成方針は次のとおりとした。
引き続き、収支を一致させる均衡予算とする。
第3次中期計画までは中期計画実行のための特別予算を組んできたが、第4次中期計画(計画期間:2015年度～2018年度)においては、その実行のための特別予算は組まず、各年度の一般予算において、活動内容(アクションプラン)の進捗に応じて必要な額を計上することとする。
- ・収入と支出のそれぞれについて、予算案の考え方は次のとおりである。

[収入]

- ① 会費収入は、2015年5月5日時点の会員数に基づいて計上した。
- ② 雑収入、事業収入、助成金収入、英文誌関連収入は、それぞれ2015年度予算または2015年度執行見込額と同額とした。

[支出]

- ① 管理費は、2014年度決算額をベースにして、事務局経費増、インターネット・セキュリティ対策費を加算して設定した。
- ② 会誌編集費は、2015年度予算と同額の2,800,000円を計上した。2013年度、2014年度の決算では2,000,000円程度で推移しているが、2011年度、2012年度の決算では3,000,000円を上回っていること、論文投稿数の増加を企画していることから、これらを勘案して2015年度予算と同額とした。
- ③ 会議費は、2015年度予算と同額とした。
- ④ 委員会活動費は、次のとおりとした。
 - ・普及・連携委員会費は、活動費、地域イベント助成費ともに、2015年度予算と同額とした。
 - ・国際交流委員会費は、活動費について2015年度予算に対して20,000円加算して計上した。なお、2016年度には国際シンポジウムの開催計画はない。
 - ・情報サービス委員会費、テキスト刊行委員会費は、それぞれ2015年度執行見込額と同額とした。
 - ・将来構想委員会費、技術援助委員会費は、それぞれ2015年度予算と同額とした。
 - ・海外派遣費は、2015年度執行見込額と同額の200,000円とした。
- ⑤ 大会費では、2016年の第20回大会を20周年記念大会として開催するために、公開シンポジウム費において、2015年度予算に対して100,000円加算して計上した。
- ⑥ 地域研究会費用は、2015年度予算と同額とした。
- ⑦ HP整備費、その他費用は、上記項目以外に発生する費用に対応する予算科目として、ICLEE活動経費等の予備的経費を確保しておくため、447,000円を計上した。
- ⑧ 英文誌関連費は、必要額を計上した。

- ・以上を設定した結果、2016年度予算案は、収入、支出ともに18,577,000円、収支差額0円の均衡予算となっている。

なお、第4次中期計画の活動内容（アクションプラン）の進捗に応じて、2016年度予算の見直しが必要となった場合には、改めて予算の補正を図るものとする。

費目	2016年度		2015年度		2014年度	2013年度
	予算(案)	設定根拠	予算	執行見込額	決算	決算
収入	18,577,000		18,200,000	18,577,000	17,770,732	21,508,357
会費収入	10,636,000		10,780,000	10,636,000	10,430,366	13,337,975
正会員会費	5,712,000	952人×6,000	5,770,000	5,712,000	6,004,830	7,270,975
学生会員会費	224,000	112人×2,000	210,000	224,000	126,400	167,000
賛助会員会費	4,700,000	47口×100,000	4,800,000	4,700,000	4,299,136	5,900,000
雑収入	401,000		200,000	401,000	890,092	531,880
会誌別刷り収入	400,000	2015年度執行見込額と同額計上		400,000	397,593	291,299
受取利息	1,000	2015年度執行見込額と同額計上		1,000	949	711
その他					491,550	239,870
事業収入	4,990,000		4,930,000	4,990,000	3,900,634	4,178,864
大会費	2,500,000	2015年度予算と同額計上	2,500,000	2,500,000	2,254,000	2,506,000
大会(研究発表会)参加費					1,704,000	1,809,000
エクスカージョン参加費					59,000	113,000
大会(懇親会)参加費					491,000	584,000
地域講座参加費	2,300,000	2015年度予算と同額計上	2,300,000	2,300,000	1,461,534	1,543,444
会誌等販売収入	190,000	2015年度執行見込額と同額計上	130,000	190,000	185,100	129,420
助成金収入	1,850,000		1,550,000	1,850,000	1,871,970	2,400,188
河川整備基金	1,000,000	2015年度予算と同額計上	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
助成金	750,000	2015年度執行見込額と同額計上	450,000	750,000	841,970	690,000
寄付金	100,000	2015年度予算と同額計上	100,000	100,000	30,000	710,188
英文誌関連収入	700,000		740,000	700,000	677,670	1,059,450
LEE購読料	700,000	正94人×7,350+学生2人×4,200	740,000	700,000	677,670	1,059,450
LEE広告掲載収入	0		0	0	0	0
支出	18,577,000		18,200,000	18,787,135	14,375,359	16,270,699
管理費	5,970,000	2014年度決算相当額5,470,000+事務局経費増300,000+インターネット・セキュリティ対策費200,000	5,652,865	5,840,000	5,470,706	5,715,042
事業費	11,757,000		11,657,135	12,097,135	7,726,778	9,402,459
会誌編集費	2,800,000	2015年度予算と同額計上	2,800,000	2,800,000	1,826,010	2,002,187
ニュースレター発行費	0		0	0	0	0
会員募集費	0		7,135	7,135	33,214	0
会議費	960,000		960,000	960,000	532,359	641,365
総会費	60,000	2015年度予算と同額計上	60,000	60,000	45,489	66,874
理事会費	450,000	2015年度予算と同額計上	450,000	450,000	265,126	319,611
幹事会費	450,000	2015年度予算と同額計上	450,000	450,000	221,744	254,880
委員会活動費	1,950,000		2,140,000	2,430,000	650,347	1,373,762
委員会関係費	1,750,000		1,990,000	2,230,000	500,347	1,223,762
普及・連携委員会費	1,000,000		1,000,000	1,000,000	491,147	559,425
活動費	700,000	2015年度予算と同額計上	700,000	700,000	191,147	259,425
地域イベント助成費	300,000	2015年度予算と同額計上	300,000	300,000	300,000	300,000
国際交流委員会費	100,000		580,000	580,000	0	483,630
活動費	100,000	2015年度予算に20,000円加算	80,000	80,000	0	0
国際シンボ経費	0		500,000	500,000	0	483,630
情報サービス委員会費	100,000		60,000	100,000	0	30,000
活動費	50,000	2015年度執行見込額と同額計上	30,000	50,000	0	0
ホームページ管理費	50,000	2015年度執行見込額と同額計上	30,000	50,000	0	30,000
将来構想委員会費	100,000	2015年度予算と同額計上	100,000	100,000	0	0
技術援助委員会費	150,000		150,000	150,000	9,200	0
活動費	50,000	2015年度予算と同額計上	50,000	50,000	0	0
河砂基準意見交換費	100,000	2015年度予算と同額計上	100,000	100,000	9,200	0
テキスト刊行委員会費	300,000		100,000	300,000	0	36,600
活動費	300,000	2015年度執行見込額と同額計上	100,000	300,000	0	36,600
テキスト刊行費	0		0	0	0	0
事務局改善WG費						114,107
海外派遣費	200,000	2015年度執行見込額と同額計上	150,000	200,000	150,000	150,000
大会費	3,300,000		3,200,000	3,200,000	2,309,929	3,026,663
研究発表会	850,000	2015年度予算と同額計上	850,000	850,000		794,610
公開シンポジウム	1,600,000	2015年度予算に100,000円加算	1,500,000	1,500,000		1,402,584
エクスカージョン	350,000	2015年度予算と同額計上	350,000	350,000		360,877
大会懇親会費	500,000	2015年度予算と同額計上	500,000	500,000		468,592
地域研究会費用	2,300,000	2015年度予算と同額計上	2,300,000	2,300,000	2,053,211	2,358,482
HP整備費、その他費用	447,000	予備的経費	250,000	400,000	321,708	0
英文誌関連費	850,000		890,000	850,000	1,171,875	408,575
LEE購読料支払い	700,000	収入額と同額を計上	740,000	700,000	721,875	408,575
ICLEE事務局維持費	150,000	平年必要額	150,000	150,000	450,000	0
その他の支出	0		0	0	6,000	744,623
源泉所得税預り金						
返金等					6,000	744,623
当期収支差額	0		0	-210,135	3,395,373	5,237,658

3. 第4号議案 第4次中期計画の策定が審議され、原案どおり承認されました。

計画の詳細については、このニュースレターの5項をご覧ください。

4. 第5号議案 第10期役員選出が審議され、以下のとおり、役員が選出されました。

役員の任期は2年です。

会 長	辻本 哲郎 (新任)	名古屋大学名誉教授
副会長	虫明 功臣 (再任)	東京大学名誉教授
	江崎 保男 (新任)	兵庫県立大学大学院地域資源マネジメント研究科教授
	國井 秀伸 (新任)	島根大学汽水域研究センター教授
理 事	甲村 謙友 (再任)	独立行政法人水資源機構理事長
	島崎 由美 (再任)	いであ株式会社内部統制本部本部長代理
	清水 義彦 (再任)	群馬大学教授
	角 哲也 (再任)	京都大学防災研究所教授
	関 克己 (再任)	公益財団法人河川財団理事長
	関島 恒夫 (再任)	新潟大学大学院准教授
	成田 賢 (再任)	応用地質株式会社代表取締役社長
	風呂田利夫 (再任)	東邦大学名誉教授
	渡辺 綱男 (再任)	一般財団法人自然環境研究センター上級研究員
	渡邊 康玄 (再任)	北見工業大学教授
	大森 浩二 (新任)	愛媛大学沿岸環境科学研究センター准教授
	萱場 祐一 (新任)	国立研究開発法人土木研究所水環境研究グループ河川生態チーム上 席研究員
	木内 啓 (新任)	株式会社建設技術研究所東京本社副本社長
	森北 佳昭 (新任)	一般財団法人水源地環境センター理事長
	山室 真澄 (新任)	東京大学大学院教授
監 事	西 浩司 (再任)	いであ株式会社国土環境研究所生物多様性計画部部长
	久保田 勝 (新任)	東北電力株式会社顧問

5. 第6号議案 第10期幹事長・幹事選出が審議され、以下のとおり、幹事長・幹事が選出されました。

なお、副幹事長には、総会後に開催された第67回幹事会において河口洋一氏が推薦され、第81回理事会において会長から任命されました。

幹事長	藤田 乾一 (再任)	株式会社大林組土木本部顧問
副幹事長	河口 洋一 (新任)	徳島大学大学院ソシオテクノサイエンス研究部准教授
幹 事	沖津 二郎 (再任)	応用地質株式会社応用生態工学研究所所長
	東城 幸治 (再任)	信州大学理学部生物科学科准教授
	中村 敏一 (再任)	一般財団法人水源地環境センター技術参与
	西廣 淳 (再任)	東邦大学理学部生命圏環境科学科准教授
	根岸淳二郎 (再任)	北海道大学大学院地球環境科学研究院准教授
	横山 勝英 (再任)	首都大学東京都市環境学部都市基盤環境コース准教授
	吉村 千洋 (再任)	東京工業大学大学院理工学研究科土木工学専攻准教授
	赤松 良久 (新任)	山口大学大学院理工学研究科システム設計工学系学域准教授

鬼倉 徳雄 (新任)	九州大学大学院農学研究院資源生物科学部門助教
尾花まき子 (新任)	名古屋大学大学院工学研究科社会基盤工学専攻助教
関根 秀明 (新任)	株式会社建設技術研究所中部支社環境室室長
堂菌 俊多 (新任)	国土交通省水管理・国土保全局河川環境課河川環境保全調整官
皆川 朋子 (新任)	熊本大学大学院自然科学研究科准教授

6. 第7号議案 名誉会員の推戴が審議され、応用生態工学会並びに応用生態工学の発展に大きな功績があった池淵周一先生、小倉紀雄先生、玉井信行先生、森下郁子先生について、名誉会員への推戴が決定しました。

3.2 第19回応用生態工学会郡山大会報告

応用生態工学会仙台

橋本 正志 (復建技術コンサルタント株式会社)

1. 大会概要

2015年(平成27年)9月10日(木)～9月13日(日)に日本大学工学部(福島県郡山市)にて、第19回郡山大会が開催されました。大会開催中の9日から11日に「平成27年9月関東・東北豪雨」が発生し、大会の開催が危ぶまれましたが、会場となった郡山市内には被害がなく、無事に大会を終了することができました。

9月10日(木)～11日(金)に行われた研究発表では、47件の口頭発表、75件のポスター発表が行われたほか、自由集会として河川砂防技術基準(調査編)に関する会議も含め、8つの集会が行われました。

9月12日(土)には、公開シンポジウム『生態系機能を活用した減災/防災/復興』が開催されました。

また、大会初日の9月10日(木)には三春ダムの見学、最終日の9月13日(日)には福島県の海岸防災林・防災緑地事業および仙台湾南部海岸での防潮堤・湿地の保全状況を見学するエクスカージョンを行いました。

本大会の参加者数は、研究発表：230名、公開シンポジウム：150名、懇親会135名でした。

【会場】

- 研究発表・総会・公開シンポジウム：日本大学工学部キャンパス 70号館
住所：福島県郡山市田村町徳定字中河原1
- 懇親会：日本大学工学部キャンパス 62号館 2階カフェテリア
- エクスカージョン
 - <Aコース>：三春ダム
 - <Bコース>：福島県松川浦・仙台湾南部海岸

【大会日程】

9月10日(木)

- ・エクスカージョンAコース(三春ダム)

	9:45	JR郡山駅東口出発
	13:15	日大工学部正門到着
- ・自由集会「応用生態工学ならではの魅力ある啓発・普及コンテンツとは？」

	09:30～11:30	7011 教室
--	-------------	---------
- ・自由集会「自然の浄化機能を活かした水質浄化技術」

	09:30～11:30	7012 教室
--	-------------	---------
- ・ポスターコアタイム1

	12:45～14:15	ロビー
--	-------------	-----
- ・ポスターコアタイム2

	14:15～15:45	ロビー
--	-------------	-----
- ・会議「河川砂防技術基準(調査編)をもとにした意見交換会」(傍聴可)

	16:00～18:00	7011 教室
--	-------------	---------
- ・自由集会「小さな自然再生が中小河川を救う！」

	16:00～18:00	7012 教室
--	-------------	---------
- ・自由集会「未来の自然災害に向けて応用生態工学ができることは何か？」

- 東日本大震災の後にどうする？どうなる？応用生態工学会」16:00～18:00 7021 教室
 ・自由集会「流域地質と山地河川の生態系」17:30～19:30 7013 教室

9月11日(金)

- ・口頭発表 09:30～12:00 7011, 7012, 7013 教室
 13:00～15:00 7011, 7012, 7013 教室
 ・自由集会「応用生態工学からダム管理を考える」15:30～18:00 7011 教室
 ・自由集会「中小河川における多自然川づくり, 課題そして展望
 ーテキスト刊行に向けた認識の共有を目指してー」15:30～18:00 7012 教室
 ・懇親会 18:30～20:30 62号館2階カフェテリア

9月12日(土)

- ・総会 10:30～11:30 7014 教室
 ・公開シンポジウム「生態系機能を活用した減災/防災/復興」13:00～16:30 7014 教室
 ・エクスカージョンBコース(松川浦・仙台湾南部海岸)
 公開シンポジウム16:30終了後 17:00日大工学部から「いわき市湯本温泉」へバス移動

9月13日(日)

- ・エクスカージョンBコース(松川浦・仙台湾南部海岸) 8:15 いわき湯本温泉 出発
 15:45 仙台空港・着
 16:30 JR仙台駅・着

2. 研究発表会

(1) 発表件数等

研究発表は、口頭発表47件、ポスター発表75件の合計122件でした。発表件数について第14回札幌大会からの経年で比較すると、以下のように増加傾向であり、郡山大会ではこれまでの大会で最も多い発表がありました。

大会名	口頭発表(件)	ポスター発表(件)	合計(件)
第14回札幌大会	36	68	104
第15回金沢大会	43	50	93
第17回大阪大会	45	70	115
第18回東京大会	45	73	118
第19回郡山大会	47	75	122

※第16回大会は3学合同大会のため比較の対象外とした。

(2) 優秀発表賞等

ポスター発表、口頭発表ともに、審査対象を1)若手研究者(学部学生、大学院生、ポスドク等の若手会員)および2)現場技術者または行政担当者に絞り、そのうち事前に審査対象となることを希望した発表者に限定しました。大会実行委員会および研究活動奨励班の理事・幹事を中心に優秀発表賞審査委員会を組織し、担当幹事が審査員を選出し、審査を依頼しました。設定した評価項目に対する得点に基づき、優秀発表賞審査委員会が受賞者を選考しました。

ポスター発表では、75件中55件が優秀発表の審査対象となり、9件が「優秀ポスター研究発表賞」に、1件が「優秀ポスター事例発表賞」に選ばれました。さらに、最も優れたポスター発表が「最優秀ポスター発表賞」として選ばれました。

口頭発表では、47件中29件が優秀発表の審査対象となり、4件が「優秀口頭研究発表賞」に、1件が「優秀口頭事例発表賞」に選ばれました。さらに、最も優れた口頭発表が「最優秀口頭発表賞」として選ばれました。

受賞論文は、以下のとおりです。

【ポスター発表賞】

<最優秀ポスター発表賞>

PG-2 ネコギギのハビタットモデルを用いた河川環境改善工法の開発と効果

八神鉄彦※(水源地環境センター)・大杉奉功(同)・高橋正信(中部地方整備局設楽ダム工事事務所)・松浦直(同)

<優秀ポスター研究発表賞>

PA-3 九州中北部における流域地質と山地溪流の河床形態の関係

西田健人※(九州大学)・佐藤辰郎(同)・島谷幸宏(同)

PG-1 サケ科魚類オシロコマに対するダム設置による水温上昇の影響を熱ショックタンパク質(Hsp)で評価する

倉橋彩百合※(新潟大学)・鎌田泰斗(同)・関島恒夫(同)・竹川有哉(徳島大学)・谷口義則(名城大学)・河口洋一(徳島大学)

PJ-3 野生絶滅前のコウノトリはどのような食性を示すのか?—炭素・窒素安定同位体比解析による検討—

田和康太※(兵庫県立大学)・佐川志朗(同)・三橋陽子(兵庫県立コウノトリの郷公園)

PE-5 菊池川流域における河道の変化と河道内氾濫原水域の氾濫原依存種の生息場としての機能評価～氾濫原環境再生にむけた基礎研究～

岡村麻矢※(熊本大学)・上杉幸輔(同)・皆川朋子(同)

PA-1 流域地質の影響はどこまで及ぶのか?—魚類の流程分布を糸口に—

澤海人※(九州大学)・川本朋慶(同)・鬼倉徳雄(同)

PL-2 次世代シーケンシングとDNA種分類法を用いた河川底生動物群集の種多様性評価

泉昂佑※(愛媛大学)・Maribet Gamboa(同)・三宅洋(愛媛大学)・渡辺幸三(同)

PE-4 深泥池におけるトンボ幼生群集:構造決定におけるニッチフィルターと分散フィルターの役割

山田紗友美※(東北大学)・加藤義和(京都大学)・辻野亮(奈良教育大学)・竹門康弘(京都大学)・占部城太郎(東北大学)

PF-1 長期流量データ解析による国内河川の攪乱レジームの評価

吉村研人※(愛媛大学)・赤坂卓美(帯広畜産大学)・三宅洋(愛媛大学)

PH-4 印旛沼の水草再生に向けて～発芽に対するヘドロの影響～

館野太一※(東邦大学)・林紀男(千葉県立中央博物館)・山ノ内崇志(東邦大学)・西廣淳(同)

<優秀ポスター事例発表賞>

PF-14 河川水辺の国勢調査データを用いた生息適地モデルによる河道掘削の評価

川口究※(いであ(株))・中原良一(同)・石垣宏(同)・白井耕平(九州地方整備局遠賀川河川事務所)

【口頭発表賞】

<最優秀口頭発表賞>

OH-7 砂礫性節足動物に対するフラッシュ放流の影響評価:群集構造と機能の短期的応答

今井悠※(北海道大学)・三浦一輝(同)・渡辺のぞみ(同)・根岸淳二郎(同)・中村太士(同)

<優秀口頭研究発表賞>

OI-4 河川水辺の国勢調査とランダムフォレストを組み合わせた外来魚種予測モデルの提案

城山理沙※(東京工業大学)・吉村千洋(同)

OC-4 河道内氾濫原における沈水植物群落の分布と成立条件

片桐浩司※(土木研究所)・池田茂(同)・大石哲也(同)・萱場祐一(同)

OJ-6 ハゼ類を指標にした河川汽水域の健全性評価とハビタットの劣化を引き起こす要因の解明

乾隆帝※(山口大学)・竹村紫苑(総合地球環境学研究所)・赤松良久(山口大学)・鎌田磨人(徳島大学)

OJ-2 Using remote sensing data for modeling mangrove propagule dispersal in Olango island, Cebu, Philippines.

Dang Truong Giang※(埼玉大学)・Takashi Asaeda(同)

<優秀口頭事例発表賞>

OE-1 那覇空港滑走路増設事業における希少海藻類（クビレミドロ）の移植技術とその効果
 平中晴朗※（いであ（株））・鳥居高志（同）・金城健吾（沖縄総合事務局那覇港湾・空港整備事務所）・大城直（同）

3. 自由集会 等

郡山大会では、7件の自由集会と1件の会議（傍聴可）が開催されました。素晴らしい集会を企画・運営していただいた関係者の方々に、心から感謝いたします。どの自由集会の会場でも、熱気のある発表や意見交換で盛り上がり、自由集会の関心や人気が高いことがうかがわれました。場所と時間の制約から、複数の自由集会を同時並行で開催せざるを得なかったため、どの集会に参加するか悩まれた方も多かったようです。今後も自由集会が大会を盛り上げ、学会の魅力向上につながることを思います。

自由集会の開催報告につきましては、各集会の企画者の方々に執筆をお願いしました。お忙しいところ原稿を執筆していただき、ありがとうございました。

■「自然の浄化機能を活かした水質浄化技術」

9月10日（木） 9:30~11:30 7012 教室

水や大気を清浄化する自然の浄化機能をうまく活用することが持続的な低炭素社会の実現のために求められている。本大会では、現在行われている人工湿地の実証試験や自然浄化の研究の紹介を通して、自然の浄化機能を活かした水質浄化技術について議論する場を設けることを念頭に自由集会を企画した。まずキーノートとして矢野篤男（東北工業大学）が人工湿地法による排水処理について紹介し、次いで7人の研究者による事例報告が行われた。荒井重行（株）三菱マテリアル：人工湿地による鉱山廃水の重金属除去、辻 盛生（岩手県立大学）：省エネルギー水質浄化施設としての人工湿地、中野和典（日本大学）：人工湿地を活用したグリーンインフラ、渡辺 敏・松下太郎（株）ウエスコ：場が動く、水が動くことによる生物活性の維持、野口彰子（神戸市環境局）：自然共生型排水処理システムの構築～神戸市での取組と展開の可能性～、尾花まき子（名古屋大学）：河川砂州における水質浄化機能、三橋弘宗（兵庫県立大学）：生物浄化に関する海外の研究事例。討論では、人工湿地に生物多様性の視点を加えることの必要性等、浄化性能を追求してきた立場には新鮮な指摘があった。人工湿地研究者と自然浄化研究者が異なる視点で交わした意見は互いに有意義なものであったはずである。今後も機会があれば継続し、意見交換を図っていきたい。

<ミニツアー：「ロハスの家の見学会」>

9月10日（木） 12:10~12:40

9月11日（金） 12:25~12:55

ロハス (LOHAS) とは Lifestyles Of Health and Sustainability の略称で、地球環境保護と健康な生活を最優先し、人類と地球が共栄共存できる持続可能なライフスタイルのことである。日本大学工学部では、資源枯渇と環境破壊が限界を越えつつある現代において、人々の生活の基盤である【家】を重要な研究対象である考え、学科を横断して、『ロハスの家』研究プロジェクトに取り組み、水とエネルギーを自給自足するモデルハウスである『ロハスの家』をキャンパス内に建設した。ミニツアーでは、この『ロハスの家』とその付帯施設である『ロハスの花壇』の見学会を企画した。貴重な昼休み時間を利用しての20分のミニツアーであったが、約20名の参加者に日本大学工学部の看板研究施設を見てもらうことができた。ご参加いただいた皆様に御礼申し上げます。



(報告：日本大学 中野和典)

■会議「河川砂防技術基準（調査編）をもとにした意見交換会」（傍聴可）

9月10日（木） 16:00~18:00 7011 教室

河川砂防技術基準（調査編）の環境分野の記載が最新の学術的・技術的水準および現場実務での活用実態・実績を踏まえううえで、必要かつ十分なレベルで適宜改定されるよう、国土技術政策総合研究所

(国総研) と応用生態工学会、土木学会水工学委員会環境水理部会の3者が定期的に意見交換を行う仕組みを構築することを目的として平成26年9月から意見交換会が開催されている。このたび、第3回意見交換会が開催された。

会議では、国総研から河川砂防技術基準(調査編)第11章河川環境調査の改定の検討方針(案)(河川環境調査の「調査の目的」に沿って記載を充実させる等)について、土木研究所萱場上席研究員から河川環境の現況評価例について説明があり、これらを議論の材料として活発な意見交換が行われた。

次回の意見交換会は、来年3月の土木学会水工学講演会(場所:東北工業大学)の際に行われる予定である。

なお、本意見交換会は関東地域づくり協会の助成金を受けて活動している

(報告:(一財)水源地環境センター 中村敏一)



■「未来の自然災害に向けて応用生態工学ができることは何か? : 東日本大震災の後にどうする? どうなる? 応用生態工学会」

9月10日(木) 16:00~18:00 7021教室

東日本大震災から5年目を迎えた今年度の自由集会では、過去2回の自由集会(2013・2014年度に開催)とはやや異なる方向から事例報告が行われた。すなわち、過去の集会では、「震災が生態系に与える影響」に関する事例報告がなされてきたが、今回は、現地で震災復興に携わる方々からご講演いただいた。稲葉修さん(南相馬市博物館)と三浦一彦さん(大槌町役場)のご講演では、現在そして将来の復興過程において、その妨げになる要因が生々しく語られており、震災復興の難しさを改めて痛感させられた。次いで、岩手県沿岸広域振興局の田村達博さんからは、実際に行われている復旧工事の概要、およびその際に行った環境配慮についてご紹介いただいた。最後に、幹事会災害対応特命班において議論されている応用生態工学会としての災害時対応の概要を藤田乾一幹事長よりご紹介いただき、その適用対象範囲と考えられる2010年の奄美大島豪雨での調査結果について宮良工さん(沖縄環境地域コンサルタント)にご報告いただいた。これらを受けての総合討論では、東日本大震災によって(再)認識された課題の整理が行われた。復興の遅れによる人口流出が被災した地域の衰退を招きかねないこと、大規模災害発生前の基礎資料収集が災害復旧・復興に重要であることが再確認された。また、環境アセスの観点からは、従来とは異なるアプローチの必要性が課題として挙げられた。すなわち、これまでの環境アセスは既存のものを対象としていたのに対し、震災後には新規環境が創出されたため、如何なるスタンスでアセスを行うべきか、という課題が提示された。当然のことながら、総合討論の時間のみで結論を出すことは不可能であるが、課題の整理という意味合いでは非常に有意義な議論となった。



(報告:岐阜経済大学 久米 学)

■「応用生態工学からダム管理を考える」

9月11日(金) 15:30~18:00 7011教室

ダムでは、治水や利水などの目的のために様々な操作が行われる。放流量コントロール(それはダム湖内の水位にも影響する)に代表される操作は、ダム湖や下流の生態系に影響を与えると考えられる。ダムの操作と生態系の関係を紹介し、操作自体をどのように生態系保全に活かすのか、操作上の制約の中でどのようにより良い生態系に導いていくかについて議論することを目的に自由集会を行った。自由集会では、まずダム湖内の水位変動に関連した3題(「水位操作とエコトーンに発達する植生の生態的機能・外来種管理の限界」(浅見和弘 応用地質株式会社)、「水位操作と外来魚管理」(大杉奉功 水源地環境センター)、「ダム湖エコトーンの生物多様性と地形・水位管理」(関島恒夫 新潟大学))およびフラッシュ放流に関する2題(「フラッシュ放流が河川・河畔域に与える影響評価」(根岸淳二

郎 北海道大学), 「フラッシュ放流への期待と制約」(天野邦彦 水源地環境センター) の話題提供を受けた。その後に行われた, 会場を交えての議論(進行: 谷田一三 大阪自然史博物館) では, フラッシュ放流の波形などについて意見が交わされた。

(報告: (一財)水源地環境センター 一柳英隆)

■応用生態工学会 テキスト刊行委員会

「中小河川における多自然川づくり, 課題そして展望—テキスト刊行に向けた認識の共有を目指して—」

9月11日(金) 15:30~18:00 7012 教室

「テキスト刊行委員会」では, 会員サービスの充実, 会員の増大を目的とした応用生態工学に関するテキストの刊行を計画している。郡山大会では, 第2号として計画している「中小河川」をテーマに, テキストに記載すべき内容について議論を行った。

集会では, 企画者の1人である萱場(土研)からテキスト刊行の状況報告と今後の方向性, 中小河川を巡る施策の展開について報告を行った後, もう1名の企画者原田(岐阜大)より「河川中流域における川づくりの課題」



について発表を行った。その後, テキストに盛り込む内容として, 佐藤(九大)から「山間地における川づくりの技術」, 関根(山口大)から「中小河川における生息場評価」, 大石(土研)から「河道計画・設計の支援づくり」のご報告を頂いた。また, コメンテーターとしてご参加いただいた巖島(九大)から山間地, 河口における最新の研究についてご意見を頂いたのち, 林(九大), 岩瀬(北海道開発技術コンサルタント)から全体に対するコメントを頂いた。「使われてきた従来の技術体系との関連性をどのように担保するかが課題」といったコメントもあり, 実務で活用してもらうためのテキストの作成に向けて示唆に富む自由集会になったと感じている。

(報告: 土木研究所 萱場祐一)

4. 懇親会

9月11日(金) 18:30~20:30 62号館(50周年記念館(ハットNE)) 2階カフェテリア

懇親会は, 大会会場である70号館に隣接する62号館2階カフェテリアで, 約140名という多くの方にご参加いただき, 開催されました。研究者の卵(学生)に色々な先輩研究者と交流をもってもらうと, 今回の懇親会は学生の参加料を少し安くしました。その効果もあったようです。

懇親会は, 橋本大会副実行委員長の開会宣言のあと, 谷田会長や来賓の出村日本大学工学部長(代理藤原工学部次長), 渥美東北地方整備局副局長にご挨拶を頂き, 占部大会実行委員長の乾杯で幕を開けました。日大食堂様にご用意していただきました「おいしい料理」を食べながら(価格を頑張っていたが, ローストビーフは和牛肉でした), 遠方でお会いする機会の少ない方々とお酒を飲みながらの歓談に, 会場は大盛況となりました。

閉会時には, 来年の大会が東京で予定されているため, 東京を代表して虫明東京大学名誉教授に来年の意気込みについてご挨拶いただきました。また最後は, 大会実行委員一同が整列して皆様にご挨拶をさせていただきましたが, 参加者の皆様から盛大な拍手を頂戴しました。大会実行委員一同, 苦勞が報われた気持ちとなり, 深く感謝しております。

最後になりますが, 例年と同様に, 全国のお酒や珍味のお土産をご持参いただきました普及・連携委員の皆様, ありがとうございます。まだ先の話ですが, 来年もよろしくお願ひします!

(報告: 応用地質(株) 沖津二郎)

5. 公開シンポジウム

応用生態工学会第19回郡山大会 公開シンポジウム『生態系を活用した減災/防災/復興』は, 2015年9月12日(土)に日本大学工学部70号館五十嵐ホールで開催されました。

本シンポジウムでは, 復興・防災・減災事業において, 多様な生態系を重要な社会基盤とみなす「グリーンインフラストラクチャー(GI)」をテーマに, 防災・減災機能に関する技術的評価や維持管理, ガバナンスのあり方も含めて, 課題や有効性について議論を深め, 最新の技術的知見や研究課題を共有し, 課題解決に向けた方向性について議論を行い, 今後の研究の進展と実事業への適用の出発点となる

ことを目的としました。

最初に、東北大学の風間 聡教授から今回のテーマを設けた趣旨の説明があり、2題の講演の後、講演者と行政および国際NGOの方2名が登壇し、パネルディスカッションが行われました。

<講演>

まず、米国海洋大気庁(NOAA) 主席エコノミスト室上席社会科学官の Kateryna M. Wowk 博士より、『海岸の将来像：米国における海岸防護機能向上のための自然、及びハイブリット型インフラストラクチャーの可能性』と題して講演が行われました。講演では、自然型インフラである潮間帯沼沢地や塩性湿地、カキ礁、サンゴ礁、マングローブ等が沿岸の防御に果たす役割や効果の研究事例が示された後、自然インフラとグレーインフラとのハイブリットアプローチの例として、ハリケーンサンディ後のアメリカでの取り組みについて、いくつかのプロジェクトが紹介されました。次に九州大学大学院工学研究院の島谷幸宏教授より、『未来に向けた環境・防災統合論』と題し、日本の風土に即した Eco-DRR について、多くの事例を交えた紹介があり、シンポジウム前日に起こった台風18号による鬼怒川破堤のドローン空撮映像も交えながら、環境と防災の両立を考える上で、災害後の人の意識変化を理解とその重要性を認識して、応用生態工学会として Eco-DRR の研究に取り組むべきことが指摘されました。



風間 聡教授



Kateryna M. Wowk 博士



島谷幸宏教授

<パネルディスカッションの概要>

パネルディスカッションでは、冒頭に国土交通省国土技術政策総合研究所河川研究部海岸研究室の諏訪義雄室長より、『自然・地域インフラと津波防災』に関する話題提供があり、次に国際自然保護連合日本リエゾンオフィス コーディネーターの古田尚也氏より、『生態系を基盤とした防災・減災に関する国際政策の展開』に関する話題提供がありました。

これらを踏まえて、コーディネーターの風間教授の進行のもとパネルディスカッションが行われました。

パネルディスカッションでは、Eco-DRR に関して、減災効果や維持管理などの技術的な話題、国際的な動向から、ハリケーンサンディ後のボストン沿岸域におけるデザインコンペティションの仕組みなど、様々な切り口からの議論が展開され、応用生態工学会としての研究のあり方、大災害時の調査団派遣についての意見など、今後の研究や活動の方向性について多くの有益な意見が出されました。

(報告：いであ(株) 樋村正雄)



6. エクスカーション

(1) 三春ダムコース (9月10日(木) 9:45~13:15)

三春ダムを訪れ、ダムの環境保全対策及び水源地生態研究のフィールドを見学しました。

最初にダム堤体展望広場で三春ダム管理所よりダムの水質対策、特定外来魚対策、土砂還元、リフレッシュ放流等の環境保全対策についてご説明いただき、三春ダムの環境保全対策の概要について学びました。

その後バスで移動し、蛇石川前貯水池では水位変動域である前貯水池に成立した典型的なヤナギ林を見学し、ヤナギ林の機能に関する調査、研究



内容について、もうひとつの蛇沢川前貯水池では本貯水池とは独立して水位低下操作が可能であることを利用した水位低下を活用した特定外来魚防除の調査、研究について、水源地環境センターの大杉室長からご説明いただきました。

台風18号の影響により悪天候の中での見学でしたが、予想していたほど雨の影響を受けず、概ね予定どおりのコースで見学できました。参加人数も予定人数を超え24名と盛況でした。

最後に、ご説明と資料の提供をいただいた国土交通省東北地方整備局三春ダム管理所、(一財)水源地環境センターの皆様には深く感謝いたします。

(2) 福島県松川浦・仙台湾南部海岸コース (9月12日(土) 17:00~21:00, 9月13日(日) 8:15~16:30)

復旧・復興が進む福島県沿岸部と仙台湾南部海岸の生態系復元の取り組みと生態系の回復状況の見学を行いました。

12日は公開シンポジウム終了後、いわき湯本温泉へ宿泊しました。台風18号により松川浦の海岸防災林事業地と埴浜防災緑地が冠水し立ち入りができなかったため、夕食後、黒沢教授からは松川浦と埴浜防災緑地の震災復興における福島県の植物の保全の取り組みについて、占部教授からは仙台南部海岸の井土浦の津波による変化と干潟の生態系の回復状況についてご講演いただき、取り組みや現在の状況について理解を深めました。

翌13日は合同開催の東北環境アセスメント協会の17名と合流し、総勢34名で見学を行いました。最初に松川浦に少し立ち寄り、対岸から海岸防災林事業地を見学し黒沢教授からご説明いただきました。その後、仙台南部海岸へ移動し、名取川河口の井土浦地区の防潮堤を仙台海川国道事務所にご案内いただき、堤防復旧と海岸地形の変遷についてご説明いただきました。最後は井土浦の東谷地へ移動し、占部教授から震災後の干潟の変化と生態系の回復状況についてご説明いただくとともに、干潟生物を観察しました。

福島県から宮城県にかけての移動距離の長いコースで、一部は台風の影響で訪れることはできませんでしたが、沿岸部の復旧・復興事業と生態系保全の取り組み、津波後の生態系の回復状況等について見識を深めることができました。

最後に、休日にご案内及びご説明いただいた福島大学黒沢教授、東北大学大学院占部教授、国土交通省東北地方整備局仙台海川国道事務所、資料をご提供いただいた福島県相双建設事務所及び相双農林事務所の皆様には深く感謝いたします。



生物の観察(井土浦:東谷地)



東谷内を背景に参加者全員で

(報告:応用地質(株) 丸谷 成)

7. 謝辞

みなさまのご協力により無事に大会を終了することができました。

会場をご提供いただき、何かと便宜を図っていただきました日本大学工学部の関係者の皆様には御礼を申し上げます。また、実行委員の皆様、学会事務局、スタッフの皆様には、ご多忙の中、長期間にわたる準備や会場運営にご尽力いただきました。あらためて深く感謝の意を表します。

大会の準備・運営に関して、初日のエクスカッションやポスター発表時間、自由集会の時間調整などで余裕がなかったなどの反省点がありました。その他にもスムーズな運営を行う上での改善について、多くのご意見をいただいております。次回大会に活かされるよう引き継いでいきたいと思っております。

最後に、第19回郡山大会の準備、運営に関わった実行委員会とスタッフを紹介して、大会のご報告

を終わらせていただきます。

【実行委員長】 占都城太郎 (東北大学大学院生命科学研究科)

【実行副委員長】 橋本正志 ((株)復建技術コンサルタント)

【実行委員・スタッフ】 (順不同、敬称略)

小川鶴蔵・浦川苑子 (応用生態工学会), 竹門康弘 (京都大学防災研究所), 西村修・風間聡・糠澤桂 (東北大学大学院工学研究科), Suppasri Anawat (東北大学災害科学国際研究所), 中野和典 (日本大学工学部土木工学科), 黒沢高秀 (福島大学共生システム理工学類), 東信行 (弘前大学農学生命科学部), 三宅洋 (愛媛大学大学院理工学研究科), 谷田貝泰子・高橋万里子 (水環境ネット東北), 佐竹一秀・吉田馨 ((株)エコリス), 町田禎之 ((株)建設環境研究所), 糠澤宏二・佐藤慶亀 ((株)建設技術研究所), 浜田拓・中武禎典 ((株)地域環境計画), 佐藤高広・山本和司・藤原悠太 ((株)復建技術コンサルタント), 平嶋賢治・高柳茂暢 (アジア航測(株)), 樋村正雄 (いであ(株)), 丸谷成・西田守一・沖津二郎・樋口貴哉・横田道博 (応用地質(株)), 栗原健 (国際航業(株)), 香川裕之・運天さつき (東北緑化環境保全(株)), 小島淳・柏舘信子・前田泰史 (日本工営(株)), 鬼久保浩正 (パシフィックコンサルタンツ(株)), 佐々木廉 (三国屋建設コンサルタント(株)), 畠良一 (日栄地質測量設計(株))

4 理事会・幹事会・委員会報告

4.1 第78回理事会報告

第78回理事会が、2015年8月6日(木)に東京都千代田区麹町の弘済会館において開催された。

なお、この理事会に付議する事項について審議するために、第65回幹事会が2015年7月17日(金)に学会事務局において開催された。

(1) 報告事項

主な報告事項は以下のとおり。

- ① 「第19回郡山大会案内」では、大会の公開シンポジウムについては河川整備基金の助成を受けているが、河川整備基金の仕組みの変更が検討されており、今後、広く一般に公開することが義務付けられることを想定して、開催案内、参加者の把握、シンポジウム後の対外発表などの対応について検討しておく必要があるとの情報提供があった。
- ② 「普及・連携委員会報告」では、普及・連携委員会においては、地域イベントの開催にあたって、各地域の公益法人への助成金申請を積極的に行うことが確認されているが、このことに関して、助成金を獲得するためには、早い時点からイベントの計画を立案する必要があるとの意見があった。
- ③ 「LEE・ICLEE 状況報告」では、LEEのEditor-in-Chiefである谷田会長から、LEEの投稿規程の改正(投稿時に1~2名のEditorを指名できること、2~3名のReviewersを推薦することができること)が予定されていることが報告された。

(2) 審議事項

以下の6件の事項について審議を行い、いずれも原案どおり承認され、2015年9月12日(土)に開催された第19回総会に諮られた(それぞれの概要については、このニューレターの3.1項、5項をご覧ください)。

- ・第4次中期計画策定にあたっての理事会コメント
- ・2015年度(平成27年度)収支見込み
- ・2016年度(平成28年度)事業計画案
- ・2016年度(平成28年度)予算案
- ・第10期幹事長・幹事候補の推薦
- ・名誉会員の推薦

4.2 第79回理事会報告

第79回理事会が、2015年8月15日(土)～19日(水)にメール会議にて開催された。

この理事会では、第78回理事会(2015年8月6日開催)において、第10期幹事長候補1名、幹事候補13名の推薦を決定したが、幹事の定員(15名以内)の範囲内で、さらに1名の幹事候補を推薦することが決定された。

4.3 第80回理事会報告

第80回理事会が、第19回郡山大会期間中の2015年9月12日(土)に日本大学工学部において開催された。

なお、この理事会に付議する事項について審議するために、第66回幹事会が同日の理事会前に同会場において開催された。

この理事会では、以下の2件の事項について審議が行われた。

① 来年(2016年)の第20回大会(20周年記念大会)の開催計画

- ・ 来年(2016年)の第20回大会(20周年記念大会)について、他学会の大会開催日程、会場候補施設の利用可能日程を考慮し、2016年(平成28年)9月2日(金)～4日(日)の日程で、東京大学(弥生講堂とその周辺施設)において開催すること、大会実行委員長に虫明功臣東京大学名誉教授を推薦することが決定した。

② 応用生態工学会における災害時の対応について

- ・ 第19回郡山大会期間中の2015年9月10日に鬼怒川破堤による災害が発生したことから、本件議事を急遽追加し、審議を行った。
- ・ 幹事会からの提案として、「応用生態工学会鬼怒川災害調査団」の派遣について、次のとおり説明があった。

この提案内容は、9月10日に開催された大規模災害対応に関する自由集会、9月11日に幹事会災害対応特命班が開催したランチョンフォーラム「応用生態工学会における災害特命班の対応について」での議論を踏まえて、幹事会災害対応特命班が取りまとめた。

水害に関する調査では、土木学会水工学委員会の水害調査との協力について検討しているが、今回は被災地の状況に詳しい学会員がいることもあり、応用生態工学会単独での調査団を派遣する。

調査団は、萱場副幹事長、西廣幹事を中心に編成し、民間企業からも団員を募集する。

- ・ 幹事会からの提案事項は次のとおりであり、理事会はこれを承認した。
 - 1) 「応用生態工学会鬼怒川災害調査団」を編成し、調査、報告、提言案作成にあたること。
 - 2) 調査団編成にあたり、必要に応じて学会名で民間企業への委嘱をすること。
 - 3) 関係機関との調整において、学会名で依頼文等を作成すること。
 - 4) 経費については、助成金への申請のほか、学会の予算から支出すること。
 - 5) 提言書を作成することとなった場合には、改めて理事会で審議すること。

4.4 第81回理事会・第67回幹事会合同役員会報告

2015年9月12日(土)に開催された第19回総会において第10期役員が選出され、新たな役員による第81回理事会と第67回幹事会の合同役員会が、総会直後に日本大学工学部において開催された。

(1) 第67回幹事会

- ・ 「副幹事長の推薦」について審議を行い、学会規約第13条第5号の規定により、河口幹事を副幹事長に推薦した。

(2) 第81回理事会

- ・審議事項「副幹事長の任命」では、学会規約第13条第5項の規定に基づき、幹事会から推薦された河口幹事を会長が副幹事に任命した。
- ・審議事項「会長職務代行者の指名」では、会長から、学会規約第11条第5項の規定による会長職務代行者として、虫明副会長の指名が行われた。

4.5 会誌編集委員会報告

会誌編集委員会（第2回）

日時：2015年9月10日（木）11：30～13：00

場所：日本大学郡山キャンパス 7012 教室

出席者：鎌田委員長、竹林副委員長、西副委員長、田代委員、西廣委員、根岸委員、柳井委員、吉村委員

議事内容

- 1) 委員長挨拶
- 2) 前回（2015年5月12日開催）議事録の確認（報告事項）
- 3) 会誌発行状況、編集作業の進捗状況
 - ・地下水の特集については今後進捗を図る。
 - ・今年度の海外派遣の方には、トピックスの投稿に向けて準備いただいている。
- 4) 投稿規程の改定について（報告事項）
 - ・前回委員会での議論、理事会での検討を経て改訂された。大きな変更は投稿資格を広げたことで、今後学生による投稿もやりやすくなるはずである。
- 5) 投稿促進策について（審議事項）
 - ・前回委員会で提案した、投稿を促すために、研究発表会での発表に対し、発表賞の委員に推薦を依頼することについては既に実行に移しており、委員に依頼済みである。
 - ・推薦は1つでもあれば、原則投稿を勧める対象とする。
 - ・投稿を勧める連絡文を送る際には、推薦を受けたことが論文の「受理」を前提にしたものではないことがわかるようにする。推薦しておいてリジェクトするのは好ましくない。
 - ・査読は通常どおり、規程に従って行うことを明記する。
 - ・推薦を受け、さらに何らかの優遇があることが著者に伝わらないと、投稿のインセンティブになりにくいのではないかと。
 - ・査読を通常よりも「すみやかに行う」ことで、学生の著者等にとってはメリットになる可能性がある。
 - ・「可能な限り優先して審査を行うこととします」というような文言を入れてはどうか。
 - ・その論文の担当編集委員には、推薦を受けた投稿であることが伝わるようにする。それにより、速やかな査読を行ってもらえるようにする。場合によっては委員長、副委員長が担当することも考える必要がある。
 - ・この投稿策をシステム化し、毎年実行することで、例えば年間の1号は大会で発表されたものが多く載り、2号で特集をするというようなサイクルができてくることが期待できる。
 - ・研究発表会では、既に他誌に掲載済みの研究も発表されている可能性もある。そこで、投稿を勧める文面には、投稿規程をよく見ること、既発表のものは載せられないこと等の注意事項を明記する。
 - ・投稿勧誘文案については、上記の意見を踏まえて作成し、各委員に意見を求めることとする。
- 6) その他
 - ・上記の促進策が効果を示し、会誌が厚くなって経費がかさむ可能性については、今後状況を見て対応を検討する。
 - ・20周年の特集号が考えられるが、今のところ企画は特に立てられていない。今後幹事会で第20回

記念大会の企画とともに検討してもらおうのがよいだろう。

- ・20年の振り返りや今後のことが、総説や意見として論文になることが期待される。
- ・その場合、例えば記念大会の際には19巻2号への掲載を前提とした論文がある程度できていることが望ましい(19巻2号に間に合わせるため)。
- ・国際交流シンポジウムの内容等に関連し、行政からのトピックスを掲載してもらおうのほうか。
- ・9月13日開催の国際シンポジウムの内容は、「トピックス」で投稿する予定である。
- ・新理事会や幹事会で、役員に「意見」等を投稿してもらえるように依頼する。
- ・現編集委員の任期は来年3月までである。今後次期の体制について相談する。

5 第4次中期計画が策定されました

第3次中期計画(2010年度～2013年度)の完了を受けて、2015年9月12日(土)に開催された第19回総会では、2015年度から2018年度までの4年間における学会活動の基本方針を示すものとして、応用生態工学会第4次中期計画の策定について審議が行われ、第4次中期計画が下記のとおり策定されました。

なお、第4次中期計画の策定にあたっては、次のとおり、理事会からコメントが発出されています。

第4次中期計画の策定にあたっての理事会コメント

2015年8月6日

骨子・目的、活動内容(アクションプラン)など、妥当なプランが作成されていると判断され、第4次中期計画を理事会として了承します。

ただし、本学会の目的である「人と生物の共存」「生物多様性の保全」「健全な生態系の持続」を実現させるために、各活動内容(アクションプラン)のなかで、生態系の保全と回復、生態系サービスの評価と活用、インフラ整備については応用生態工学的な理念と配慮をそれぞれ活かすように活動すること、また、多様な生態系を支える水循環との連関、他の学会との会レベルや共通フィールド(現場)での連携についても、各活動内容(アクションプラン)のなかで強化することを希望します。

(文責：会長 谷田一三)

応用生態工学会 第4次中期計画

2015年(平成27年)9月

1. 中期計画の骨子と目的

応用生態工学会は、生態学と工学の関係者が共同して「人と生物の共存」「生物多様性の保全」「健全な生態系の持続」を共通の目標に、生態学と工学の境界領域において、新たな理論・知識・技術体系としての「応用生態工学」を確立し、発展させていくことを目的として1997年10月に発足した。

2015年現在、その活動の幅は広範囲に及び、会員数は継続して1,000名以上を維持し、学界や社会での認知度も高まっている。

この間、3次にわたる中期計画のもとに学会活動の発展と改善が進められてきた。例えば、学会の設立当初から、経済的に自立した事務局運営が課題のひとつであったが、第3次中期計画の実行によりかなりの改善が進められた。この第3次中期計画では、7つの骨子と、そのもとに目標を掲げたが、会員数の増加を除けば、それぞれの目標を達成、あるいは、おおむね達成することができた。

一方で、近年、会員数や会誌への論文投稿数に大きな伸びがみられないなど、継続的な課題として残されている事項も少なくない。また、東日本大震災のような大規模災害、生物多様性の世界的な損失、地球温暖化の影響の顕在化等を契機に新たに課題となった事項もある。学会活動における課題について、第3次中期計画の7つの骨子と対比して示すと、表-1のとおりである。これらの課題については第4次の中期計画に反映することによって、学会活動の活性化、学会のさらなる発展、世界的な問題解決への貢献を図っていくことが必要である。

表-1 学会活動における課題

前期(第3次)中期計画の骨子	継続的な課題・新たな課題
学会活動の充実	(会誌編集委員会) 会誌への投稿が少ない, 査読期間の短縮 (普及・連携委員会) 地域活動への参加者の増加, 現場ニーズの研究活動への反映 (国際交流委員会) 会員の国際交流の促進 (情報サービス委員会) ウェブサイトの活用促進 (地域研究会) 活動経費の維持・確保
幹事会活動の強化充実	・理事-幹事担当制の定着と活動の強化 ・ <u>気候変動適応策, 大規模災害への対応, 防災・減災事業と自然環境保全の両立など, 新たな課題への取り組み</u>
会員サービスの充実, 会員増を目指す	・会員数の減少, 会員サービス(メリット)の強化 ・ <u>学会賞の創設</u> ・ <u>他学会との学会誌の相互閲覧サービス</u> ・ <u>研究発表実績に対する社会的評価の向上</u>
事務局運営の経済的な自立	・財政の安定化・健全化, 事務局人材の確保
応用生態工学に関するテキストの刊行	・テキストの継続的な発刊
工学分野, 生態学分野における「応用生態工学」的な視座の浸透	・技術援助の継続 ・ <u>気候変動適応策, 大規模災害への対応, 防災・減災事業と自然環境保全の両立など, 新たな課題への取り組み</u>
応用生態工学会の社会および学界における認知度を高める	・学会認知度の把握と向上(広報) ・ <u>気候変動適応策, 大規模災害への対応, 防災・減災事業と自然環境保全の両立など, 新たな課題への取り組み</u> ・ <u>会誌での特集号の増加(気候変動適応策, 大規模災害など, 社会的関心の高いテーマ)</u> ・ <u>国際会議でのセッションの実施</u>

備考: 1. 下線付きの課題は、「新たな課題」を示す。

2. 「継続的な課題」は「第3次中期計画の事後評価」(2014年9月)から抽出した。また、「新たな課題」は将来構想委員会での議論に基づく。

以上のことを踏まえ、今般、2015年度から2018年度までの4年間における学会活動の基本方針を示すものとして、第4次の中期計画を策定した。

第4次中期計画においては、応用生態工学会が現場における課題の解決を目指し、もって社会に貢献する学会であることから、これまでの活動の継続や充実を通じた社会への貢献に加え、新たな社会的課

題への対応を骨子のひとつに掲げるとともに、表－1に示した学会活動における課題を踏まえて、中期計画の骨子・目的を次のように設定した。

- ①新たな社会的課題への対応
 - ・気候変動適応策，大規模災害への対応，防災・減災事業と自然環境保全の両立など，新たな課題への取り組み
 - ・国際的な技術交流・情報発信
- ②学会活動を通じた社会への貢献
 - ・他分野との交流
 - ・国内への情報発信
 - ・対外活動の充実
 - ・各委員会活動の継続・充実
- ③学会活動の充実と活性化
 - ・会員サービスの充実
 - ・研究発表実績に対する社会的評価の向上
 - ・ウェブサイトの活用促進
- ④学会運営の健全化・安定化
 - ・会員増
 - ・事務局体制の安定的な維持

2. 活動内容（アクションプラン）

第4次中期計画の各々の骨子・目的のもとに中期計画の期間内に取り組む活動内容（アクションプラン）を表－2のとおり設定する。

また、表－2では各々の活動内容（アクションプラン）について企画検討担当と実施主体を併せて示しているが、実施主体については活動内容（アクションプラン）の企画検討と併せて検討を進めることとする。

なお、第4次中期計画の期間は前期と同様に4ヶ年とし、2年経過時に中間評価、計画期間終了時には事後評価をそれぞれ実施し、総会において会員に公表・説明を行う。

表-2 第4次中期計画の骨子・目的と活動内容(アクションプラン)

第4次中期計画の骨子・目的		活動内容(アクションプラン)		企画検討担当	実施主体
1. 新たな社会的課題への対応	気候変動適応策, 大規模災害への対応, 防災・減災事業と自然環境保全の両立など, 新たな課題への取り組み	・気候変動適応策等の調査・研究課題への取り組み	・気候変動適応策等の調査・研究課題や防災・減災事業と自然環境保全の両立に向けた研究に対し, 学会として取り組む方向性, 他の学会との連携体制を整備する.	幹事会	
		・大規模災害等, 緊急時の学会対応体制の検討	・大規模災害時の学会としての緊急調査等の対応方針を検討し, 実施体制の整備(派遣費用等の準備)を行う.	幹事会, 特命班1	
		・会誌での特集号の増加	・上記の情報等を会誌上で特集し, 社会への情報発信の一助とする.	会誌編集委員会, 研究活動奨励班	会誌編集委員会
	国際的な技術交流・情報発信	・アジア地域の研究者・組織との技術交流	・国内の留学生を含め, アジア地域の関連分野の研究者・組織への情報発信等を通じて技術交流を深める.	幹事会, 国際交流委員会, 国際交流/ICLEE対応班	国際交流委員会
		・国際会議でのセッションの実施	・国際会議(2018年開催予定の International Symposium on Ecohydraulics (ISE 2018)等)において, 応用生態工学会としてセッションをもつ.	国際交流委員会, 国際交流/ICLEE対応班	国際交流委員会
		・LEE特集号(大規模災害, 放射性物質等)の推進	・上記国際学会の発表, 東日本大震災を中心とした大規模災害と生態系, 放射性物質による生態影響などのインパクトがあるテーマで英文誌 Landscape and Ecological Engineering (LEE) の特集号を組むことを検討する.	幹事会, 国際交流/ICLEE対応班	国際交流/ICLEE対応班
2. 学会活動を通じた社会への貢献	他分野との交流	・他学会との学会誌の相互閲覧サービス	・一方の学会の会員になれば, 他の学会の学会誌内容を J-STAGE から見られるなどのサービスの提供について検討を行う.	幹事会	
		・合同研究発表会等(ELRの継続)の取り組み	・三学会合同大会(ELR)の継続のほか, 他学会との合同発表会(地域研究会も含む.)を目指す.	幹事会, 全国活動運営班	大会実行委員会, 普及・連携委員会(担当地域委員)
	国内への情報発信	・テキスト刊行の継続	・第2刊目以降のテキスト刊行活動を継続する.	テキスト刊行委員会, 学術成果総括活動班	テキスト刊行委員会
			・発刊したテキストについて, セミナー等による普及に取り組む.	テキスト刊行委員会, 普及・連携委員会	テキスト刊行委員会, 普及・連携委員会
		・ウェブサイトを活用した情報発信	・ウィキペディア等を用いた用語解説, YouTube等を用いた動画(現場で使える調査技術の講習ビデオ等)の配信, Facebookを用いた会員交流等による情報発信について検討を行う.	幹事会, 情報サービス委員会, 広報班, 学術成果総括活動班	
		・重要テーマに関する bibliography の作成	・テキスト刊行と連携し, 重要テーマに関する bibliography(書誌, 目録)の作成について検討を行う.	幹事会, 学術成果総括活動班	
	対外活動の充実	・技術援助の継続実施	・応用生態工学の視座の浸透と事業等への活用に向けた学術的な技術援助を継続して実施する.	技術援助委員会	技術援助委員会
			・河川砂防技術基準(調査編)をもとにした意見交換を継続実施し, 学会の調査・研究成果について河川管理の実務への反映を図っていく.	幹事会(技術援助活動班)	幹事会(技術援助活動班)
			・市民活動への技術支援に取り組む.	普及・連携委員会	普及・連携委員会
	各委員会活動の継続・充実	・会誌への投稿増, 査読期間の短縮	・会誌編集事務局体制を強化し, 査読期間の短縮を図る.	会誌編集委員会	会誌編集委員会
・行政関係者とも連携し, 「レポート」等の論文投稿促進キャンペーンを重点的に行う.			会誌編集委員会, 研究活動奨励班	会誌編集委員会, 研究活動奨励班	
・地域活動の充実, 現場ニーズの研究活動への反映		・地域活動拠点を増やすとともに, それぞれの地域での産官学連携を促進する. それにより現場ニーズが研究活動に反映されるような情報発信の仕組み等を構築する.	普及・連携委員会, 全国活動運営班	普及・連携委員会	

第4次中期計画の骨子・目的		活動内容 (アクションプラン)		企画検討担当	実施主体
2. 学会活動を通じた社会への貢献	各委員会活動の継続・充実	・海外の最新情報の把握 (派遣, 研究者招聘)	・海外学会等への派遣, 国際交流イベント (2年に1回開催) を継続実施する.	国際交流委員会	国際交流委員会
			・上記の取組みにおいて得られた情報の概要は公開し, 詳細は会誌やニュースレター等で会員向けに配信する.	国際交流委員会, 情報サービス委員会, 広報班	国際交流委員会, 情報サービス委員会
		・ウェブサイトの維持	・情報発信のツールとしてのウェブサイトを継続的に維持する.	情報サービス委員会, 広報班	情報サービス委員会
3. 学会活動の充実と活性化	会員サービスの充実	・学会賞の創設	・大会での優秀発表賞のみならず, 論文賞 (和文, 英文), 学会奨励賞, 学会賞的なものを作る. 技術者向けの現場の表彰等も検討する.	幹事会, 研究活動奨励班	研究活動奨励班
		・学会行事のCPDプログラムとしての登録	・学会行事について, 関係学協会のCPD (継続教育) 認定プログラムとしての登録申請を積極的に行う.	事務局改善ワーキンググループ, 財政・組織運営班	学会事務局, 各委員会, 地域研究会, 大会実行委員会
	研究発表実績に対する社会的評価の向上	・研究発表実績に対する評価の向上検討	・会誌掲載論文について, 技術者としての評価を得る要素となりえないか, 検討を行う.	幹事会, 事務局改善ワーキンググループ, 財政・組織運営班	
	ウェブサイトの活用促進	・会員に向けた情報の提供	・関連分野の海外最新情報, 行政の最新情報等について会員に向けた提供を行い, 賛助会員も含め, 会員であることのメリットを強化する.	幹事会, 事務局改善ワーキンググループ, 情報サービス委員会, 広報班	情報サービス委員会
4. 学会運営の健全化・安定化	会員増	・個人会員増キャンペーン	・個人会員の増加に向けた加入キャンペーン策を検討, 実施する.	事務局改善ワーキンググループ, 財政・組織運営班	学会事務局
		・賛助会員の募集活動	・関連企業, 研究機関等に賛助会員募集の案内を継続的に送付する. そのためのツール (学会パンフレット等) を作成する.	事務局改善ワーキンググループ, 財政・組織運営班	学会事務局
	事務局体制の安定的な維持	・事務局改善ワーキンググループでの継続検討	・事務局改善ワーキンググループにおいて, 学会財政の安定化と事務局業務の負担軽減に向けた検討を継続実施する.	事務局改善ワーキンググループ, 財政・組織運営班	事務局改善ワーキンググループ

6 行事開催報告

6.1 第7回 応用生態工学会 全国フィールドシンポジウム in 熊本 ～河川・沿岸環境の変化と土砂管理～

応用生態工学会全国フィールドシンポジウム in 熊本 事務局
 応用生態工学会福岡 普及・連携委員 酒井奈美 (西日本技術開発(株))

今年の全国フィールドシンポジウム(以下FS)は6月に熊本県で開催し、190名近くの参加を頂きました。国内初の本格的なコンクリートダムの撤去として話題になった球磨川の荒瀬ダムとその下流の河口・沿岸域を視察し、河川・沿岸環境の変化と土砂管理について現場の状況を共有し議論しました。

●開催趣旨

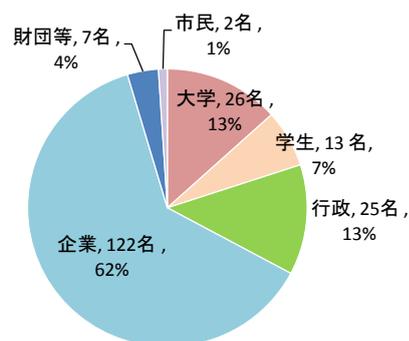
近年、世界各地で河川に流出する土砂を適正に制御する技術が求められています。

土砂生産の多い日本では、防災・資源・環境の側面から、流域スケールで総合的に土砂管理計画を立てる必要があるため、供給される土砂の量や質に対する河川・河口干潟・沿岸海域の生態系の応答を把握し、土砂管理の環境目標を示すことが不可欠ですが、未だ定量的研究が少ないのが実状です。

そこで今回の全国FSでは、「河川・沿岸環境の変化と土砂管理」をテーマに掲げ、シンポジウムでは、応用生態工学的な観点から河川・沿岸環境の変化と土砂管理のあり方について議論し、フィールドツアーでは、2012年から撤去が始まった熊本県球磨川の荒瀬ダムから八代干潟までを視察し、土砂供給に伴う下流河川や干潟環境の現状を多様な分野の視点から確認しました。

●実施体制・参加者内訳等

主催：応用生態工学会
 共催：熊本大学・九州大学
 後援：熊本県企業局・(一社)建設コンサルタンツ協会九州支部・
 (公社)日本技術士会九州本部
 実施主体：応用生態工学会福岡
 参加人数：延べ195名(所属別内訳は右グラフ)
 実行委員長：皆川朋子、副委員長：島谷幸宏・林博徳
 CPD単位：6月12日3.83、6月13日4.66((一社)建設コンサルタンツ協会認定)



●シンポジウム

日時：2015年6月12日(金) 13:00～17:30
 会場：熊本市国際交流会館(熊本市)
 参加費：学会員1,500円、非会員2,000円、学生1,000円
 参加者：188名(内訳：学会員96名、非会員79名、学生13名)
 プログラム：

12:00 開場
 13:00 開会挨拶・総合司会：皆川朋子(熊本大学大学院自然科学研究科准教授、全国FS実行委員長)
 趣旨説明：竹門康弘(京都大学防災研究所水資源環境研究センター准教授、応用生態工学会普及連携委員長)

13:10～講演

基調講演：「流域の持続的管理を目指した貯水池土砂管理」角哲也(京都大学防災研究所水資源環境研究センター 教授)

講演1：「荒瀬ダムの撤去と周辺環境の変化」堀内眞二(元熊本県企業局荒瀬ダム撤去室 室長)

講演2：「耳川水系ダム通砂に伴う河川環境変化」朝崎勝之(九州電力(株)耳川水力整備事務所 副所長)

講演3：「八代干潟の地盤高・底質変化&生物の応答」鬼倉徳雄(九州大学大学院農学研究院 助教)

講演4：「有明・八代海の環境特性と再生方策」滝川清(熊本大学名誉教授、熊本大学沿岸域環境科学教育研究センター 特任教授)

講演5：「河川の土砂管理と自然再生」島谷幸宏(九州大学大学院工学研究院環境社会部門 教授)

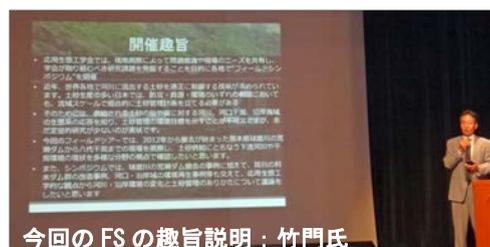
16:30～パネルディスカッション コーディネーター：竹門康弘、コメンテーター：全講演者

17:30 閉会挨拶：島谷幸宏(応用生態工学会副会長)



「流域の持続的管理を目指した貯水池土砂管理」角哲也

貯水池の持続的管理のための流砂系土砂管理の意義、国内外の最新技術、ダム撤去を含めた今後の展望について基調講演を頂きました。貯水池土砂管理の各手法(排砂・バイパス・土砂還元・通砂等)の適切な選択・組合せ、ダム撤去についての十分な準備とコストの必要性、土砂供給による河川地形管理(従前の砂州や瀬淵構造の回復)や多様な水温構造・粒状有機物の捕捉・生物ハビタット創出への効果等についてお話いただきました。



今回のFSの趣旨説明：竹門氏

「荒瀬ダムの撤去と周辺環境の変化」堀内真二

荒瀬ダム撤去室室長として事業に係わられた経験から、荒瀬ダムの概要、撤去作業、合意形成のプロセス、モニタリング手法と環境変化についてご講演いただきました。撤去開始後の環境変化として、ダム下流の土砂堆積や細粒化、ダム上流の流水回復区間での瀬淵等再生、底生動物の増加等のご報告がありました。



基調講演：角氏

「耳川水系ダム通砂に伴う河川環境変化」朝崎勝之

耳川水系総合土砂管理の概要、河川環境変化把握の取組みについてご講演いただきました。ダム改造と運用変更による土砂流下、モニタリング手法、指標種の出現モデルを利用した影響評価、流域関係者一体の取組み等を具体的にお話いただき、通砂による瀬・淵の再生や生物多様性向上の予測結果等が示されました。



講演1：堀内氏

「八代干潟の地盤高・底質変化&生物の応答」鬼倉徳雄

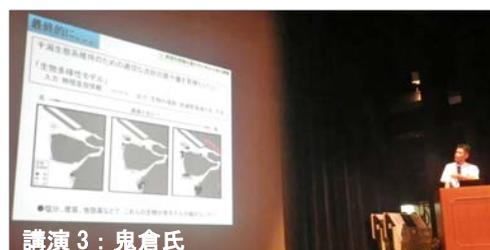
干潟生態系の維持機構の解明の研究成果として、荒瀬ダムゲート運用開始後の干潟堆積厚変化や砂礫の増加等の物理環境の変化、干潟生物の応答としての種数増加や種組成の変化についてご講演いただきました。また、物理基盤情報と生物種数・絶滅危惧種の分布に着目した生物多様性モデルのご紹介もありました。



講演2：朝崎氏

「有明・八代海の環境特性と再生方策」滝川清

有明・八代海の環境変化、環境改善の総合的視点と技術体系、国・大学等各機関の調査研究・連携体制等についてご講演いただきました。環境再生の最新技術はもとより、目標設定や多様な主体との合意形成のあり方等、海域の環境保全・再生と防災に長年貢献されてきたご経験を交え広域的な視点でお話いただきました。



講演3：鬼倉氏

「河川の土砂管理と自然再生」島谷幸宏

球磨川の地形・地質特性の解説、河川の構造と生態系上の機能、自然再生における河川の土砂管理の役割、河口域のタイプ分類とハビタット形成システムの評価等についてご講演いただきました。また、地方創生に寄与する歴史的史跡の復元と環境再生等の複合的機能を持つ球磨川八の字堰再生事例の紹介を頂きました。



講演4：滝川氏

パネルディスカッション

アンケートにて事前に会場からの意見や質問を共有した上で、竹門氏を中心に、「河川・沿岸環境の変化と土砂管理」の研究課題・技術・ゴール設定・合意形成等について全講演者で議論しました。

◆総合土砂管理に関する応用生態工学の研究課題

- ・ダムによる連続性遮断の対策オプションと評価手法
- ・供給される土砂量・質⇔地形⇔生態系機能連関の解明
- ・ダム撤去・通砂による環境変化の分析・解釈



講演5：島谷氏

- ・干潟の局所環境変化や生物応答の分析・解釈
- ・河川水理モデルによる河川環境変化予測と沿岸水理モデルによる河口干潟の環境変化予測←科学的に合理的な目的変数
- ・沿岸海域の構造的把握と類型区分←環境特性と生物相の因果関係
- ・研究成果から問題解決に向けた課題の明確化→目標設定+対策提案
- ・現状把握 河川・河口・沿岸の立地条件+土砂の分級過程
- ・治水・利水要請との合理的融合

◆土砂管理と環境再生に向けた課題、技術について

【角】荒瀬ダムは回転率の高い流れダムであり、撤去前もかなり土砂は出ていたが、粗い粒径の流下はこれから始まる。今後の土砂の到達状況、応答としての河道・干潟地形等の変化を把握する必要がある。また、ダム撤去あるいは耳川のように通砂でも対応可能なのか、流域全体の視点で土砂管理の最終形を考えていく必要がある。

【堀内】荒瀬ダムではみお筋部の撤去、一昨日の 2,000m³/s 規模の雨で大きく変化し、500m下流で土砂堆積している。上流からの供給土砂が多く、ダムに堆積していた土砂との区別は困難。今後下流の通砂の影響評価にも利用できるよう、下流堆砂変化の解析整理に努めている。

【朝崎】耳川では治水利水環境のバランスが取れた通砂計画となるよう工夫。通砂はタイミングが重要。貯水池の大きさ・勾配によりどの位水位低下すれば良いか分かってきた。環境予測しながら通砂も徐々にステップを踏んで行き、順応的に管理していきたい。

【鬼倉】生物は干潟の環境、物理場に依存している。水理計算で局所の物理場の変化を予測した上に生態系モデルをのせるのが理想。同時に現状のデータから環境再生で提案できることから課題を解決したい。

【滝川】流域からの土砂による海域への影響把握、環境再生に活用するには、水質や有機物分解等物質収支のデータが不足している。また、有明海では8割の海岸が人工化し、流れと環境が単純化し生物も減少している。水理+物理+SI 的な生態系モデル等、総合的視点でどんな軸を選び評価するか、最終目標の共通認識を持ち、学術研究も河川-港湾も垣根越えて連携していくことが必要。

【島谷】川と海の研究のアプローチが違い、川-ハビタットとしての空間構造やインパクト、海は物質循環をベースに捉えている。滝川先生の「きれいな濁り」という言葉が印象的。泥が海域まで供給されることの重要性を含めマクロな視点で環境変化を捉え、土砂動態が生態系の再生にどう関わり、環境をどう保全できるかを見定めながら、諦めず取り組むことが重要。

【竹門】境界条件としての地形変化は 100~1,000 年に1回の大きなイベントでおこる。ダム撤去後の環境変化も大きな出水で影響が及ぶかもしれない。本来の地形形成のダイナミズムを考慮して環境を捉える必要がある。

◆目標設定、合意形成のあり方について

【堀内】合意形成は難しい。荒瀬ダムではダムに堆積した土砂を全て下流に流すのではなく、地域の懸念材料を把握し説明した上で、アユ生息環境や下流の水位上昇に配慮しシルト・砂を撤去する等により事業への理解を得た。

【島谷】荒瀬ダムでは地域の懸念をきちんと拾い、柔軟な対応や丁寧な説明をして合意形成が得られた。八の字堰の事業でも、上下流の漁協等多様な立場の人に委員に入ってもらったり、公開の場を設けたりと工夫している。

【角】下流では濁りが流れてくることへのマイナスの意見も出る。細粒分の収支や海域へ供給される意義、濁水のタイミングの変化によるインパクトについても議論が必要。出水時の濁水は良いが濁水長期化は好ましくない。また、CVM 等用いた土砂管理の経済価値の評価も重要課題。

【滝川】合意形成のためには、科学的データを集め問題意識を共有した上で、望ましい・持続的な場をどう設定するか議論すべき。地域の人々の望みも含め、皆で環境を良くするという共通認識を持って一同が考え議論する場を設け、取り組みの最初の時点でゴールを明確にしておくことが重要。

【朝崎】事業者だけでなく行政・学識者・地域住民・漁業者等皆が議論できる場・枠組みが必要。耳川ではさらに公民館レベルでの説明会も実施。上・下流での利害関係や要望の相違には学識者の知恵も借り進めている。

【竹門】総合的な流域管理は、治水・利水・環境・産業等の面から設定した目標・ゴールの折り合いをつけていくプロセスが重要。応用生態工学会としても多様なステークホルダーが一堂に会し議論する場を今後も提供したい。

◆閉会挨拶

島谷氏から、FS にご協力、ご参加いただいた皆様への謝辞、今後の学会普及連携活動への抱負と協力要請について述べられました。また、運営委員長の皆川氏から、今回の FS を機に、河川と海域の研究者や事業者が連携し、皆



会場の様子



パネルディスカッションの様子



で持続的な環境再生・土砂管理に取り組んでいきたいとの言葉が述べられ、シンポジウムが閉会しました。

●懇親会

日時：2015年6月12日(金)
 会場：麦菜館(熊本市内)
 参加費：5,000円(学生3,000円)
 参加者：100名

懇親会では全国から集った多様な分野・所属の皆様が交流し、賑やかなひとときでした。



懇親会の様子

●フィールドツアー

日時：2015年6月13日(土)
 会場：球磨川流域(八代市)
 参加費：3,000円(バス・お弁当込)
 参加者：94名(学会員56名、非会員28名、学生10名)
 プログラム：

- 9:00 熊本交通センター発(熊本市)→新八代駅
- 10:35 遥拝堰八の字堰形状復元と瀬の再生箇所
(解説：国土交通省八代河川国道事務所)
- 11:10 荒瀬ダム
(解説：元熊本県企業局荒瀬ダム撤去室 堀内眞二)
- 11:45 昼食 食事処和嶋(お弁当)
- 13:10 中北地区ヨシ原再生箇所
(解説：国土交通省八代河川国道事務所)
- 13:50 南川河口干潟生物観察
(解説：九州大学大学院農学研究院 鬼倉徳雄)
- 14:45 八代港「なぎさ線の回復」現地実証試験地
(解説：熊本大学沿岸域環境科学教育研究センター 増田龍哉)
- 15:15 意見交換(進行：九州大学大学院工学研究院 島谷幸宏)
- 15:40 解散 新八代駅→熊本空港→熊本交通センター着

当日は、梅雨の真っ只中であいにくの雨天でしたが、予定どおり5箇所のフィールドを見学しました。当日の球磨川は平常時の約10倍の流量で、上流ではごうごうと流れる川のエネルギーを間近で感じ、河口では一転して穏やかな八代干潟に触れることのできたフィールドツアーでした。

◆遥拝堰八の字堰形状復元と瀬の再生箇所

バス車中で、国土交通省八代河川国道事務所さんから球磨川の流域の歴史や概要について紹介いただいた後、河口から約9kmの遥拝堰下流の八の字堰形状復元と瀬の再生箇所を見学しました。

球磨川は肥後国熊本藩初代藩主加藤清正公により様々な治水技術が施されたことでも有名ですが、八の字堰もその一つで、球磨川の激流を減殺するとともに下流に瀬・淵が形成されること等が利点です。その後撤去された八の字堰の形状を再現することにより、地域の歴史を活かしたかつての風景の再生、アユ等の生息場となる瀬・淵のある多様な河川環境の再生が期待されています。

◆荒瀬ダム

熊本県企業局さんの案内で河口から約20kmの荒瀬ダムを見



遥拝堰八の字堰形状復元と瀬の再生箇所



荒瀬ダムと下流の様子



荒瀬ダム



昼食の様子



中北地区の覆砂箇所

学しました。荒瀬ダムは全国初の本格的なコンクリートダムの撤去が進められている事例であり、平成24年から撤去工事が進められています。堀内氏より今年の出水でダム下流に砂州が形成されたこと、ダムの撤去工事の手法、モニタリング状況等を解説いただきました。

ダム堤体は現在みお筋のある右岸側半分が既に撤去されており、現場では残った堤体の上から間近に再生されつつある川の流れの迫力を感じることができました。

昼食はダム下流の食事処の大広間にて、清流球磨川の鮎の塩焼きや甘露煮、地元特産の天然猪の猪汁やかずら豆腐を使ったお弁当を食べながら、参加者の会話も弾んでいました。

◆中北地区ヨシ原再生箇所

国土交通省八代河川国道事務所堂菌所長（当時）に解説を頂きながら、河口から約1kmの中北地区の干潟・ヨシ原再生箇所を見学しました。球磨川から分派する支川の南川・前川河口部では、過去の砂利採取や航路浚渫、河川改修に伴い干潟・ヨシ原が減少しており、現在中北地区等で河道掘削土砂を有効活用し、潮の動きやヨシ等の生育地盤高を考慮した覆砂を実施しています。現地では長靴や胴長で干潟に入り見学しました。八代海や有明海で減少している干潟の高地盤帯は特に絶滅危惧種が集中しており、海・川と陸のつながりの再生が必要といった意見がありました。



干潟生物の解説



なぎさ線の回復現地実証試験地

◆南川河口干潟

中北地区の対岸の南川に渡り、河口から約0.2km左岸の自然の干潟を見学しました。事前に鬼倉氏の教え子である九州大学大学院生物資源環境科学府の学生たちが事前に採取してくれた泥干潟の生物（チワラスボ、トビハゼ、シオマネキ、ヤマトオサガニ等）を手に取り、地盤高・底質と生物の関係等の解説を受け観察しました。また、国土交通省九州地方整備局の河口氏には、過去の南川の風景や環境の様子も紹介いただきました。雨は本降りでしたが、干潟で生物採取にチャレンジする参加者もみられました。

◆八代港「なぎさ線の回復」現地実証試験地

最後の見学フィールドである八代港「なぎさ線の回復」現地実証試験地では、熊本大学沿岸域環境科学教育研究センターの増田氏に案内いただき、浚渫土砂にリサイクル材として八代市の製紙工場から出るペーパースラッジ灰等を混合し改良した干潟造成砂の開発と現地実証試験の解説を受けながら、試験地の干潟を観察しました。試験地では生物種数は増加傾向にあり、岩礁状に固まった干潟造成材も生物の新たな生息環境として機能していること、子供達の体験学習の場等としての今後の有効活用にも話題が及びました。

◆意見交換

フィールド見学を終え、参加者でふりかえりを行いました。島谷氏からは、九州でこれだけ大きなイベントが開催でき、全国の方々に九州のフィールドを知っていただけたこと、関わってくださった全ての皆様への感謝の言葉が述べられました。

九州大学名誉教授の楠田哲也氏に総評を頂き、陸と海をつなげて総合的に考え、皆が力を合わせてより良い環境をつくるという共通目標の達成に向け、調査研究や合意形成に努力していきたい、との言葉を皆で共有し、フィールドツアーは閉会しました。記念撮影では、雨の中でも皆様笑顔で、事務局一同嬉しくほっとできた瞬間でした。



フィールドツアー参加者での記念撮影

●おわりに

九州では初開催の全国FSでしたが、全国各地から予想を上回る多くの皆様にご参加いただき、事故や大きなトラブルもなく、無事全行程を終えることができました。

限られた時間の中でダム・河川・海岸までと多様な内容を盛り込むにあたり、ご講演者の皆様はじめFSに

携わっていただいた皆様には企画段階からご無理をお願いしたにも関わらず、快くご協力を賜りました。

講演者の皆様、共催を頂いた熊本大学、九州大学、熊本県企業局、(一社)建設コンサルタンツ協会九州支部、(公社)日本技術士会九州本部の皆様、現地案内を頂いた熊本大学、熊本県企業局、国土交通省九州地方整備局ならびに八代河川国道事務所の皆様、運営にご協力いただいた八千代エンジニアリング(株)九州支店、(株)建設環境研究所九州支社の皆様、西日本技術開発(株)の仲間にご心より感謝申し上げます。

参加して下さった皆様には、タイトなスケジュールや満員のバスでの移動等、ご不便をおかけしたにも関わらず、2日間にわたり積極的にご参加を頂き、アンケートでも多くのご意見を頂きました。ここに厚く御礼申し上げますとともに、頂いたご意見を今後の学会活動にも活かしてまいりたいと思います。

6.2 地域勉強会 in 福井 ～天然アユを名田庄に！～ － 榎谷川魚道群から考える －

応用生態工学会福井

木下 猛 ジビル調査設計(株)

福井県の嶺南地方にある二級河川南川は、魚類をはじめ多様な動植物が生息している自然豊かな河川です。しかし一方で、自然河川のシンボリックな天然アユが減少しています。平成27年10月18日(日)に開催した本会では、天然アユが上流域(名田庄)まで遡上降下できる安全かつ魚の棲みよい南川水系にするともに、さらには天然アユが地元の経済・社会活動の一端を担うようになればと考えました。

南川の2次支川の榎谷川は、平成5年度からの流路工の整備に伴い平成8年度から平成23年度にタイプの異なる魚道が落差工に設置されています。本会では、この榎谷川の魚道群を題材とし、魚道の特性、効果および課題について学ぶことを企画しました。天然アユだけでなく全魚種が遡上降下するための工夫を、参加者が考える場としても意味深いものと思います。

森川裕美氏(帝国コンサルタント)の司会により、趣旨説明と現地見学場所の説明の後、榎谷川現地に向かい各魚道を見学し、その後会場(おおい町里山文化交流センター)で福井県小浜土木事務所 冨田茂生氏、福井県立大学准教授 田原大輔氏にご講演いただき、里山ねっこ代表 萩原茂男氏、若狭河川漁業協同組合増殖委員長 小松輝治氏らには榎谷川の自然再生についてお話をうかがいました。

参加者は、研究者、管理者(行政)、設計者、施工者、NPO、学生等の計44名でした。

趣旨説明

田安正茂氏(福井工業高等専門学校准教授)より、趣旨説明がありました。これまでの応用生態工学会福井の活動は嶺北が中心で、今回、嶺南で勉強会を開催することは意義深く、関係機関との連携した勉強会となることを期待されておられました。榎谷川には様々なタイプの魚道が設置されているので知見も広がると述べられました。



田安正茂氏による趣旨説明

榎谷川の説明

田原大輔氏(福井県立大学准教授)より現地見学する榎谷川の説明をうけました。まず本川の南川と一級河川の北川とでは魚道の整備状況に違いがあって南川は魚道整備が進んでいることを説明されました。榎谷川は砂防指定河川であり落差工や砂防ダムが多くあることなど河川の特徴の説明と、今回、現地見学する魚道のタイプや特徴を説明されました。



会場の様子

現地見学

流 守博氏(福井県建設技術研究センター主任研究員)の案内で、魚道について出来た経緯や工夫点、課題等を説明いただきました。

特に、それぞれの魚道の課題を主体的に説明されたことが印象的でした。例えば、階段式魚道(S字型)では流速を小さくし魚類の休息場とするためS字型にしましたが、土砂堆積が多く、かつ流況が複雑になってしまうので、真っ直ぐに水が流れる様にした方がよいとの文献も見られるとのことでした。ただ現況でもカジカ等の遊泳遡上力の低い魚種もうまく壁際の流

速の遅い部分を伝って遡上も見られるようです。

福井県が考案した全断面魚道では、水通し部に傾斜を設けているのが特徴で、中央部を流速の早い水が流れることで、外側の流速が遅くなる特徴があります。また、増水したときにも石の間の流速を落として魚が上りやすくするために隔壁頂面に礎石を配置しました。(もう少し石組みのような配置にできれば効果は高かったという反省もありました。) 今後、福井県で砂防河川に魚道を整備する場合にはこの全断面魚道を採用するということでした。



階段式魚道 (S字型)



全断面魚道 (福井県考案)



現地見学の様子

榎谷川魚道群の設置について (埴田茂生氏：福井県小浜土木事務所)

榎谷川魚道群の整備の経緯を時系列で説明されました。

榎谷川の魚道整備は、初期の平成8年度では階段式の切欠型の魚道を採用したが、平成14年度には積極的に全断面魚道で整備したこと、また、平成24年2月に「福井県 砂防河川における魚道整備の基準(砂防事業設計指針)」の改正が行われ、新たに落差工を設置する際には全断面魚道を整備することが原則化されたことから、福井県考案の単純プール型岩組階段式魚道で整備するようになったことの説明がありました。対象魚は、遊泳魚では大型をサクラマス、中型をヤマメ、小型をムギツクとし、底生魚はカワヨシノボリとアカザで検討しているとのことでした。



埴田茂生氏による講演

魚道の設置効果について (田原大輔氏：福井県立大学准教授)

「魚道の指針などはアユ等の遊泳能力が高い魚種を対象に作成されていますが、カジカ等の遊泳遡上力が低い魚種は魚道があっても遡上できません。特に、水の剥離があるとカジカ等は遡上しづらくなります。

そこで、カジカに標識やピットタグを付けて、各魚道の個体の移動率を調査し、その結果、魚道のない分断区では上に移動した個体はなく、下に移動した個体だけであったが、魚道を整備した改修区では上に移動した個体が48匹あり、魚道の効果はあったと言えます」とのことでした。

また剥離が魚の移動を阻害する大きな要因の一つですとも言われていました。



田原大輔氏による講演

質疑応答

□質疑1：本川の南川ならびに1次支川染ヶ谷川の魚道整備の計画についてお聞かせいただきたい。

応答a：本川の南川は1次支川 染ヶ谷川(2次支川 榎谷川)までは魚道整備を完了していて、染ヶ谷川は現在、要望はしているものの明確な整備計画予定は立っていません。

応答b：堰や落差工などの河川横断工作物の必要性を十分に吟味した上で、魚道の設置を考えるべきだと思います。

□質疑2：そもそも魚類は何故遡上するのでしょうか。

応答 a : 学術的にも難しい問題で一言では言いづらいのですが、個体群の約2割が移動していることから、成長などの競争に負けたものが移動(遡上)しているのではないかと考えています。

榎谷川の自然再生について(萩原茂男氏: 里山ねっこ、小松輝治氏: 若狭河川漁業協同組合)

コメンテーターに萩原茂男氏と小松輝治氏をむかえて、進行役を田原大輔氏が務められて当会を進行しました。

小松輝治氏から榎谷川でよく見られたシャデ網漁や、毎年実施されているアユの産卵場の造成について、説明いただきました。

萩原茂男氏から山地や山道の管理が適正に行われていないため山が荒果て、それが魚類の生息環境を悪化させることを説明いただきました。また、“遊ぶ”ために川や山の本来あるべき環境を保全しなければならないとおっしゃっていました。



萩原茂男氏(右)と小松輝治氏(左)

閉会挨拶

最後に、廣部英一氏(福井工業高等専門学校名誉教授)から閉会挨拶がありました。

「地元の意見を聞く場として有益だったと思われ、また住民の方々も公共事業がどのように計画され実施されるのか、最新のモニタリングの内容等を理解していただくことができたと思います。天然アユは、地域のシンボルとして支持され賛同されるものであり、これから漁協をはじめ関係機関の連携を深め、自然再生を進めていただきたいと思います」と話されました。



廣部英一氏による閉会挨拶

最後に、共催していただきました(公財)福井県建設技術公社、ご後援をいただきました福井県立大学・福井県・おおい町・若狭河川漁業協同組合・ふくい里川研究会、ご協力いただきました福井工業高等専門学校・福井県建設技術研究センター、そして日頃から応用生態工学会福井の活動にご参加いただいている県内のコンサルタント・建設資材メーカー・建設会社・NPO・行政等の技術者の皆様に厚くお礼申し上げます。

**6.3 応用生態工学会長野現地見学会
～上下流の連続性を考える～**

応用生態工学会長野
元木達也 (株)環境アセスメントンセンター

1. 概要

平成27年11月4日(水)、秋晴れの中、信濃川上流の千曲川において現地見学会を開催しました。

この現地見学会は、千曲川で行われている多自然川づくりの実例を現地で見学しながら、多自然川づくりの技術的な課題や学術的な知見について議論し、川づくりにおける課題と展望について理解を深めることを目的として開催しました。副題の“上下流の連続性を考える”は、応用生態工学長野の活動テーマとして、今年の第13回北信越現地ワークショップから取り入れています。なお、当日の参加者は31名でした(学会員10名、非会員21名 うち学生5名)。

2. 現地見学会

参加者はマイクロバスに乗車し、千曲川中流域の多自然川づくりの現地を巡回しました。現地では、河川管理者である国土交通省千曲川河川事務所の方々に施工目的やその後の状況について説明していただきました。



河道掘削箇所(冠着橋)の説明

2-1 冠着橋

冠着橋の周辺は、平成26年3月の千曲川中流域砂礫河原保全再生検討会の設置を受けて、河道掘削による切り下げを行い、洪水による自然営力を受けやすい環境を創出しました。ここでは、平成27年9月の出水で冠水した場所とそうでない場所で植物の生育状況が異なっていました。

2-2 鼠橋

鼠橋周辺の自然再生は、冠着橋よりも前の平成20年に実施されています。ここでは、千曲川河川学術研究会で得られた知見をもとに、平水流量時に冠水する高さ、年一回程度冠水する高さの2段階の切り下げを行っています。7年の経過後もその形状が保たれており、植生の違いが明瞭にみられたことが印象的でした。



河道掘削箇所（鼠橋）

2-3 大正橋

大正橋周辺では、千曲川流域で広くみられる巨石水制やワンドについて説明していただきました。ワンドは多自然川づくりを意図したものではなかったそうですが、水制工の上流に伏流水が流れ込んでおり、深みには魚類の姿が多くみられました。ここでは、巨石を用いるメリットやデメリットなどについて説明があり、参加者からも水制と護岸の違いについてなど、盛んに質問がありました。



巨石水制の説明（大正橋）

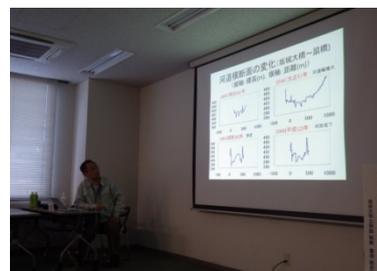
3. 勉強会

現地見学会のあとは、千曲市総合観光会館に移動して勉強会を開催しました。勉強会に先立ち、当会会長の沖野外輝夫 信州大学名誉教授より趣旨説明がありました。勉強会では、以下3題の講演があり、講演と現地見学会をあわせて活発な討論となりました。

3-1 講演：千曲川の環境特性

(信州大学工学部 豊田政史 准教授)

最初の演者である豊田准教授からは、千曲川の環境特性について講演していただきました。日本最長の信濃川となる千曲川といえども、その区間ごとに形態が異なること、特に、蛇行率の高い区間や網状流の発達した区間についてなど、千曲川の川づくりを行ううえで基礎となる情報を教えていただきました。



豊田准教授の講演

3-2 講演：千曲川における自然営力を活かした砂礫河原再生の取り組み

(国土交通省千曲川河川事務所 岩井 久 調査係長)

現地見学会に引き続き、岩井係長からは河川管理者の立場で取り組まれている砂礫河原の再生について紹介していただきました。礫河原とともに減少した生物と、それに反比例するように増加したハリエンジュやアレチウリのデータをはじめ、砂礫河原の必要性が十分に伝わる内容でした。

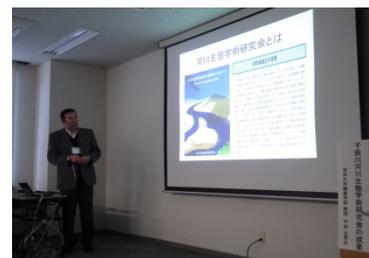


岩井係長の講演

3-3 講演：千曲川河川学術研究の成果

(信州大学繊維学部 平林公男 教授)

最後の演者である平林教授からは、全国に先駆けて行われた千曲川での河川生態学術研究会をご紹介いただきました。河道掘削による人為的インパクトと河川生態系のレスポンスの解明に取り組んできた研究会では、平成27年から藻類などを捕食する二次生産者による生産量を求める研究が始まったそうです。この研究は、河川の生産性が高い千曲川中流でこそ行う意味があります。その成果の活用を含め、研究の重要性についてわかりやすく発表していただきました。



平林教授の講演

4. おわりに

記入していただいたアンケートには、「行政、物理環境、生物環境のそれぞれの立場の話を聞くことができてよかった」「生物多様性につながる研究は大変興味深かった」「今後も、その後の成果、河川管理への提言をお聞きできたらと思う」などのご意見をいただきました。

また、「今回の内容が2回目、3回目につながっていくことを期待します」というご意見もいただきましたので、今回の反省点を次回につなげていければと考えております。勉強会で講演いただいた3名の方々をはじめ、活発な討論に参加いただいた皆様に深く感謝申し上げます。

7 2015年度(平成27年度) 行事経過と今後の予定

4.1	2015年度(平成27年度) 開始	
4.6	第1回次期役員募集・推薦委員会	(麴町：応用生態工学会事務所)
4.5~24	国際交流委員会(メール会議)	
4.14	事務局改善ワーキンググループ会議	(麴町：応用生態工学会事務所)
4.17	郡山大会第2回実行委員会	((株)復建技術コンサルタント会議室)
4.25	2015年度海外学会等派遣者決定	
5.12	会誌編集委員会	(麴町：応用生態工学会事務所)
5.12	第64回幹事会	(麴町：応用生態工学会事務所)
5.15~21	第76回理事会(メール会議)	
5.22	ニュースレター68号 発行	
6.1~30	次期役員候補募集	
6.12	普及・連携委員会	(熊本市国際交流会館)
6.12~13	第7回全国フィールドシンポジウム in 熊本 ～河川・沿岸環境の変化と土砂管理～ 6月12日(金)：シンポジウム 6月13日(土)：フィールドツアー	(熊本市国際交流会館、球磨川)
6.18	第77回理事会	(麴町：弘済会館)
6.28	会誌「応用生態工学」Vol. 18-1 発行	
7.6	第2回次期役員募集・推薦委員会	(麴町：応用生態工学会事務所)
7.9	地域勉強会 in 福井 ～技術者のための魚道講座～	(九頭竜川流域防災センター他)
7.17	第65回幹事会	(麴町：応用生態工学会事務所)
7.29	第3回次期役員募集・推薦委員会(メール会議)	

7.31	ニュースレター69号 発行
8.6	第78回理事会 (麹町：弘済会館)
8.15～19	第79回理事会 (メール会議)
8.17	応用生態工学会札幌セミナー 「本来の川を取り戻すために…その10」 (札幌市豊平川さけ科学館、札幌市南区区民センター)
8.26	事務局改善ワーキンググループ会議 (麹町：応用生態工学会事務所)
9.10～13	応用生態工学会第19回郡山大会 (日本大学工学部キャンパス) 9月10日(木)：エクスカージョンA [三春ダムコース] (午前半日) ：研究発表(ポスター)、自由集会 9月11日(金)：研究発表(口頭)、自由集会、懇親会 9月12日(土)：午前：総会、午後：公開シンポジウム 9月13日(日)：エクスカージョンB [福島県松川浦・仙台湾南部海岸コース]
9.10	普及・連携委員会 (日本大学工学部)
9.10	会誌編集委員会 (日本大学工学部)
9.10	国際交流委員会 (日本大学工学部)
9.12	第66回幹事会、第80回理事会 第81回理事会・第67回幹事会 (日本大学工学部)
9.13	国際シンポジウム 流域・沿岸におけるグリーンインフラの概念と方法論 ～応用生態工学の今後の展開を考える～ (東京工業大学くらまえホール)
10.4	第1回ミュージアム連携ワークショップ in 大阪 公開講座：自然史からグリーンインフラを考える (大阪市立自然史博物館)
10.16～17	第14回北信越現地ワークショップ in 富山 山-川-海のつながりを考える PART II (富山県立大学他)
10.18	応用生態工学会福井 平成27年度地域勉強会 天然アユを名田庄に！ - 榎谷川魚道群から考える - (おおい町里山文化交流センター、南川支流榎谷川)
10.21	<後援>平成27年度多自然川づくり近畿地方ブロック担当者会議 (大阪合同庁舎第1号館)
11.4	応用生態工学会長野 現地見学会 ～上下流の連続性を考える～ (千曲川、千曲市総合観光会館)
11.6	<共催>第18回河川生態学術研究発表会 (東京証券会館ホール)
11.13	応用生態工学会金沢 第1回視察研修 (自然共生研究センター)
11.26	応用生態工学会福岡 第5回遠賀川中島自然再生研究会 (遠賀川水辺館)
12.15	ニュースレター70号 発行
12.17	応用生態工学会連続セミナー 第1回未来の環境を語り・考える会 (一財)水源地環境センター)
12	会誌「応用生態工学」Vol. 18-2 発行
2	第68回幹事会 (麹町：応用生態工学会事務所)
2	ニュースレター71号 発行
2	2016年度海外学会等派遣者募集
3	第82回理事会
3.31	2015年度(平成27年度)終了

8 事務局より

8.1 いつもながらの勤務先等の会員情報変更登録のお願い

会員情報の変更登録は、ホームページのトップ画面右上の「入退会・登録変更・購読」バナーから入り、「会員登録情報変更フォーム」から入力して、送信してください。

また、下記 URL で「会員登録情報変更フォーム」へ直接接続することもできます。

<http://www.ecesj.com/FS-APL/FS-Form/form.cgi?Code=change>

会員情報変更のご連絡は、学会事務局のアドレス、e-mail eces-manager@ecesj.com にメールをいただくことでも可能です。

会誌のお届け、ニュースレター、その他連絡では、かなりの不達が発生しています。よろしくお願いたします。

.....

[2015年11月11日現在会員数]

名誉会員	:	9名
正会員	:	968名
学生会員	:	124名
合計	:	<u>1,101名</u>

LEE購読者数

正会員	:	91名
学生会員	:	2名
名誉会員	:	1名
合計	:	<u>94名</u>

賛助会員 : 33法人 (50口)